
Lostpowers

東 孝太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lost powers

【Nコード】

N7944S

【作者名】

東 孝太

【あらすじ】

今年で16歳になる主人公の少年は悪魔でありながらも「情」を持っていた。少年のいる魔会では「情」を持つことはタブーとされていたため少年は16年間隔離され続けていた。

少年はとうとう自らの誕生日に「情」を持つことを普通としている人間界に逃げると決意する。

人間界に降りた少年が見た現実のつらさと人間会で起きていたある異常とは……。

第1録 井の中の悪魔、大界へ（前書き）

「情」 それは他人に対する優しさの気持ち。辞書で引いてみるとだいたいこんなことが書いてある。

ある一人の少年はその情が多く、いわゆる情深い存在であった。

情深い。人間界では少なくとも良いとされる人物だ。

だが、不幸にも少年は情を大切とする人間の世界には誕生しなかった。

彼の生まれたのは情を毛嫌い、多く持つものを軽蔑する悪魔のすむ世界。

つまり魔界に誕生したのだ。

少年は魔界で嫌われ、避けられた。

しかしそんな少年も幸福な事に魔界には同種族を危めてはいけないという条例があるため少年は殺されない。

だが少年にとっては他人に避けられる生活が死よりも苦痛であった。そんな少年はどうとう魔界を逃げ出す決意をする。

第1録 井の中の悪魔、大界へ

Lost Power 第1録

「井の中の悪魔は大海に憧れ、旅立つ」

「誕生日おめでとう我が息子よ！この魔界の王子よ！」

「今日であなとも140歳。もう子供じゃないわね！」

モニター越しに少年は祝いの言葉をかけられた。何故モニター越しかと言うと、彼は世間から嫌われる情を多く持つものだからである。しかも情は伝染病の用に他人にうつるため、少年は親からも隔離され、会話すらモニター越しなのである。

「ありがとう。父さん、母さん。あれ？あいつは？」

「あいつ……。あ、ああレミルの事ね。なんか友達と魔性の森にいくだとかなんとか」少年の母親は少年の問いに答えたのち、画面したから大きな袋を取り出した。

「プレゼント。今からそっちに転送するから」少年の母親は右手に袋を持ち、近くの穴に駆け寄った。

「母さんが届けてよ」少年はモニターに向かって笑顔で言った。

「嫌」少年の母親は冷たい顔付きになり、穴にプレゼントを入れた。少年の部屋にプレゼントが落ちた。

「いくら誕生日だからって直には会えないわよ。調子に乗らないの」少年の母親は隣にいる少年の父に同意を求めるような言葉を発した。少年の父もあたりまえのように首を立てに5回振った。

「じゃあね。また会える日まで」モニターは母親の言葉を最後に途切れ、少年の部屋に沈黙が走った。

「なんだよ……。皆俺を煙たがってよ。病原菌みたいに扱いやがって。まあ殺されないだけいいか……。」少年はプレゼントを拾い上げ、開けた。

中には魔界では見たことの無い物が詰まっていた。

「？なんだこれ……。」少年はある物が気になり、手に取った。

「可愛いキーホルダー・・・」少年が手に取ったのはM A D E I N J A P A Nとかかれたアニメのキャラクターがついたキーホルダーである。

「じゃばぁん？ 人間界の地名か・・・」少年はキーホルダーを近くの机に置くと、本棚に向かった。

少年が手に取ったのは人間界と魔界の言葉で書かれた本。少年はその本でJ A P A Nを見つけ、その記事に魅入った。

「日本・・・東洋の島国。独特の文化であるアニメーションや漫画で世界の人気を獲得している。あ、これだ」少年はそのページを破り、近くにあった鞆に詰めた。

「こっから逃げて行く目的地が決まったぜ・・・。ようやく・・・」少年はカレンダーを見た。

「商人が帰ってくる日は明日と来週の虎。明日にするか・・・」少年は椅子に座った。椅子は古いせいか軋み、少し左に傾いた。

「よし。決めたぞ・・・」少年は机の中から紙切れとペンを取り出し、ペンを紙に当てた。

少年は紙に魔界脱出作戦とつづった。そしてそれに続き、明日の16時に商人が人間界から帰還し、魔界にある人間界行きの扉が開くこと、その商人の荷物に紛れ、魔界から逃げることを書いた。

少年は計画を書き終えた後、目覚まし時計をセットし、ベッドに倒れ込んだ。

そして、若干、口元を緩めながら眠りについた。

＊

少年が目覚めたのはそれから12時間後の事である。

少年が眠りについた時から商人が帰ってくるまで12時間なので、当然商人はもう帰ってきていた。

少年は飛び起き、急いで胸にあるペンダントを握った。

「やばい！寝過ぎた！役立たずの目覚ましめ。こんちくしょう！時

間がない！あまりこの手は使いたく無かったんだか」

少年が手を翳すと、少年の手から黒い衝撃波が発つせられ、壁は吹き飛んだ。少年が住む城に警報のベルがなる。

少年は少し悲しげな表情をして、真っ黒な羽で飛び立った。

少年が商人達の集まる広場に着いた時にはもう商人達は人間界に旅立ちはじめていた。少年は魔力を使い体を小さくした。少年はそれ姿のまま商人の荷物の小さなポケットに飛び込んだ。

（とりあえず第一段階は上手くいった……。後は天命に身を任せるか……）

少年は鞆の中からキーホルダーを取り出し、握った。そして目をつぶった。

＊

突然の大声で少年は目覚めた。しかも聞こえた事柄は決して良くない話であった。

「貴様ら命が惜しければ大人しく荷物と金をよこせ」

少年を入れた荷物を持つ商人の前に現れたのは最近魔界で騒がれている族であった。数は20はいる。

騒がれていると言っても名前がだいという騒がれかたであるが。

「逃げろ！ 荷物だけは守るんだ！」商人達が叫ぶ。

「応じないか。なら力付くで奪うまで」毒牙族は一斉に手の平を向けた。

少年が荷物から逃げる前に、少年を入れた荷物は毒牙族の攻撃をくらい、燃えあがった。

「そんな・・・後少しだったのに・・・」

少年の意識は除所に遠退く。

「もう駄目だ：」

完全に意識の無くなった少年は闇に消えていった。

第1録 井の中の悪魔、大界へ（後書き）

主人公の少年の名前を出してないのは、ある考えせいです。
これから見ただけだと幸いです。

感想とかももらえると嬉しいです

第2録 l o s t p o w e r s (前書き)

前回のおさらい

「情」を持つことをタブーとしている魔界で「情」を持つことで世間から隔離され、自由の無かった悪魔の主人公。

主人公は16回目の誕生日にとうとう魔界から人間界への脱出を試み、途中までは成功したが、人間界に下りる途中で賊の攻撃を食らい、主人公は闇に消えるのであった。

第2録 lost powers

少年が目覚めたのは広大な砂漠の上だった。凄まじい日光が砂を照り付け、砂は高温を帯び、陽炎が出ている。

少年は体に走る痛みを堪えながら上体を起こした。

「どこだ・・・ここ・・・」少年はよろめきながら立ち上がった。頭についた砂を手で払い、回りを見渡す。

「あ・・・ありゃ町か？ いや・・・蜃気楼ってこともあるか・・・」

少年は町であってくれ、と祈りながら、日が照り付ける灼熱の大地をゆっくり歩きはじめた。

町は蜃気楼ではなかった。

人々の活気が入り混じり、広場で子供が遊んでいる。

（人間は情深いんだよな・・・倒れてても助けてくれる・・・だろ・・・）少年は人が多い所まで無理して移動し、体を前に倒した。無理したせいかな、少年の意識はどんどん遠退く。

薄くなる視界で少年は自分の回りに人が集まってくるのが確認できた。

（やっぱり・・・な・・・）少年は口元を緩めた。

そして、目を閉じた。

少年が目覚めたのはベッドの上でも、ソファの上でもなく、石の上だった。しかも倒れた位置と全く同じである。

―つまり誰も少年を助けていないのだ。

（何故だ・・・人間は情深いんじゃないのか？）

少年はゆっくり体を起こした。起き上がると、近くに宿が見えた。少年は舌打ちをした。助けてくれない人間に、そして人に頼りすぎた自分の不甲斐なさにも。

少年は宿に足を運び、ベッドに飛び込んだ。ようやくゆっくり休めたので、少年は吐息を付き、今までの苦労を思い出した。

―その時だった。

凄まじい爆音が響き、建物がゆれた。爆音が響き、少年が驚いていと、続いて悲鳴が少年の耳に入った。

「ゆっくり寝かせてくれよ！クソっ！」少年は憤怒した。だが怒ったところで音が止むはずもない。

窓を力強く開けた少年の前には異様な光景が広がっていた。

全長10mはあろうかというサソリが建物を薙ぎ倒し、暴れていた。サソリのしたには血だらけの死体が幾つも転がり、先ほど遊んでいた子供も紛れていた。

少年が目を凝らして見てみると、サソリの下に子供がはいつくばり、頭を伏せていた。本人は必死で体を守っているようだが、全くガード出来ていない。サソりに蹴飛ばされ、無残にも地面に転がった。子供は死ぬ、少年はそう思った。そして、窓に足をかけた。

少年は2階の窓から飛び出した。

―落ちた。

「ごぶ！」少年は腹を強く打ち、もがいた。そして逃げ惑う人々に蹴飛ばされ、踏まれた。

（畜生！なんで飛べない！人間界だからって魔力が使えないわけないだろ！）

少年は胸元を見た。

「そ・・・そんなバカな・・・」

少年の胸元からは魔力を使うために絶対に必要な魔石の入ったペンダントが消えていた。

「なんでない！　これがない」少年が驚愕し、あわてふためいてい

る時、サソリの視線がこちらを向いた。
先ほどの子供は地面に倒れ、動かない。

（こうなったらヤケだ！魔力無くても、人間界では相当な力がある
だろ！）

少年は拳に力を入れ、サソリに向かって走り出した。

「あんなにバカデカい体だったら行動も遅いはず」少年はこんなことを言いながら、サソリに詰め寄る。

だがサソリは少年よりかは速くないが、車並の速さで少年に突進した。

「えっ、ちょ、まっ」少年は足を止めた。サソリが大きく飛び上がり、少年の上に落ちてきた。

「わわわわっ！」少年は泡をくってその場を離れた。

（でかいくせになんて速さだ……。畜生！このままだと……。）

少年は近くの瓦礫を持ち上げ、サソリに向かって投げた。サソリは後ろに下がる。

少年はサソリが後ろに下がった隙に一気に詰めより、右拳をサソリの頭に食らわせた。

―だが攻撃は弾かれ、少年は無防備の状態で空中に浮いた。

（マズい！ガードを）少年が手を出した時だった。

少年はサソリのハサミに弾かれ、建物まで吹き飛んだ。そして少年は崩れる建物の下敷きとなった。

崩れた建物の下から、血が流れた。

第2録 lost powers (後書き)

次回ヒロイン出ます

第3録 旅は道連れ、世は情け（前書き）

人間界に逃亡した主人公の少年（悪魔）は不慮の事故により、魔力を失ってしまう。

そこに街を襲っていたさそりの足が振りおろされ、少年の腹部を貫いた。

第3録 旅は道連れ、世は情け

（いってゝっ！　なんて硬さだよあのサソリ！　生物しゃねえな・
・。機械か？）少年は瓦礫を除け、立ち上がった。少年の頭から流れ出した血が、一滴、地面に垂れた。

サソリはと言うと、起き上がった少年を気にせず、逃げ出した子供を目で追っている。

少年が頭から流れる血を拭った時だった。

サソリから逃げていた子供が瓦礫に躓き、転倒した。子供はすぐに体制を変え、逃げようとするが、サソリは子供が転んだ一瞬の隙を逃さなかった。

サソリはものすごいスピードで子供に近づき、鋭い足で子供の腕を貫いた。子供の細い腕はもげ、子供は血に染まった。子供の悲鳴が響く。

「ヤバイ！あいつ死ぬ！」少年は全力と言っていいほどの力でサソリの元まで走った。そして近くにあった鉄パイプを取り、サソリに投げた。

鉄パイプはサソリの頭にあたり、弾かれた。だが、サソリの視線は子供ではなく少年に向けられた。

「今だ！逃げろ！」

少年の言葉に子供は答えず、ぐったりしていた。

少年は舌打ちした。そしてサソリの足元に転がり込み、子供を掴んだ。

子供を抱えたまま少年は走り、近くにいた黒髪でツインテール少女に押し付けた。

「どこか安全な所に！」少年はそれだけ言い残し、またサソリの元に走った。

サソリは口から少年に向けて液体を吐き出した。少年はかわしたが、液体がかかった床は溶け、異臭を放った。

「やっぱり機械か？」少年は瓦礫を飛び移りながらサソリの撃退方法を考えていた。

その時だった。

サソリが急に後退したかと思えば、いきなり少年にビームを放ち、少年の肩を貫いた。

それと同時にサソリの尻尾が伸び、少年の顔を裂いた。

裂かれたのは左目だった。少年は瓦礫から転げ落ち、地面にたたきつけられた。

呻きながらもがく少年にサソリのハサミが振り下ろされた。諦めかけ、ガードもしない少年の横を黒い何かが横切った。

黒い何かはサソリの額を槍で貫き、少年を抱えて後退した。

「おまえはさっきの・・・」

ボロボロなった少年を助けたのは先ほど少年が子供を押し付けた少女だった。黒髪のツインテールに黒目の少女。黒いドレスを身に纏い、悲しげな表情で少年を見ていた。

「あんたバカ？」

少女の口から最初に出た言葉に少年は耳を疑い、目を白黒させた。

「零に武器も持たず戦うなんて自殺行為だよ」

「ゼロ？なんだそりゃ」少年は問いた。少女はそれに対し、ため息をついた。

「ゼロすら知らないって、なんて田舎者だ。バカだ」少女は罵った。少年は少女の言葉が頭に来て少女の手を振り払った。

「バカバカうるせえ！しつこいぞ」

「助けてやったのに、最低なやつだ」少女はまた吐息をつく。

「あれはだな、そう簡単には倒せないぞ。全身鋼だ」

「なら」少年は左目の激痛に耐えながらサソリを見た。サソリの額には槍が浅く突き刺さり、今にも抜けそうな状態だった。

「なんで槍が刺さるんだ」

「奴は額が弱点なのだよ。柔らかくはないが、槍ぐらいは刺さる」
「弱点ね・・・」少年は口元を緩めた。

「まさか素手であの槍を突き刺そうなんて愚かな考えはしてないだろうな。っておい！」少女が話している途中に少年はサソリに向かって走り出していた。右拳に力を込めて。

サソリの攻撃を避け、サソリの足元まで近寄った少年はサソリの下に潜った。もちろんサソリは少年を潰そうと体を地面にたたき付けた。

サソリが屈んだその瞬間であった。

少年はサソリの弱点の額が低くなった瞬間にサソリの前に現れ、突き刺さっている槍をもっと深く突き刺した。

「どうだ！素手でも出来たぜ！」少年は槍を掴んだまま、ガッツポーズをした。

「馬鹿！逃げろ！」少女の声と共にサソリは黒煙を上げて爆発した。少年は爆発に巻き込まれ、吹っ飛んだ。

吹っ飛び、建物に突っ込んだ少年の意識は完全に無くなった。

＊

少年が目覚めたのは小さなベッドの上。近くにコーヒーらしき飲料と中年男性がある。中年男性は居眠りをしていて、はなちようちんが出来ている。少年はその姿に少し笑った。

「いてて・・・さすがに爆発は効くなあ」少年は包帯の巻いてある体を撫でるように触った。

「魔力・・・失っちゃった」少年は唇を噛み締めた。

「何を失ったって？」

どこからか可愛らしいが冷たい声が聞こえた。声の主は先程の少女。ドレスは血にまみれ、少女は不機嫌そうな顔をしている。

「君のせいで私の大事な服が血だらけだ。まったくどうしてくれる」

「え？俺のせい？」

少年が首を傾げると、少女は、しらばっくれるのか最低だな、と罵った。

「血だらけで倒れていた君をここまで連れてきたからだ」少女は服の臭いをかいだ。

「臭い。弁償だな」

「弁償？ 俺金ないぜ」少年は近くのコーヒーを手に取り、啜った。

「なら」少女は不気味に笑った。

「体で払ってもらうしかないな。さっきの戦いを見て分かった。君はかなりの力量がある。私の旅のお供にはぴったりだから」

「旅？ なんの目的で」

「さっきもみた通り、今この世の中には零という生物兵器が生息している。ただしくは動物型生物殺戮核搭載兵器。Sって言う奴らが操っている」

「ふーん。エスねえ、ダッセエ名前」

「名前はいいとして、私は今、そのS達を壊滅させるために旅をしているのだよ。だが私だけではきつい、だから君に手伝って貰う」

「まってくれ、俺はジャパンに行くっていう野望・・・仕事があるんだ」

「なら、なおさらだ。そのSの本部は日本にある」

「・・・」少年は黙った。この女について行き、日本へ行くか、自分で自由に日本へ行くか考えているのだ。

「拒否は認めない」少女は若干強めに言った。少年はまだ口を閉じ、黙っている。

二人の間に沈黙が続いた。外から吹き付ける風が窓に当たり、カタカタと音をたてる。

「・・・わかった」少年が沈黙を破った。すると、難しそうな顔をしていた少女は急に笑顔になった。

「よし！ 契約決定！ さっそく明日から出かけるわよ！」少年はこの時思った。

この子はテンションで喋り方が変わる、と。

「まず自己紹介から始めよう！ 私はヒメザカユキネ。ジャパニーズよ。名前はお姫様の姫に坂道の坂で姫坂。雪に音で雪音。君は？」

姫坂は突然自己紹介を始めた。普段、人と自己紹介どころか顔を合わせることもしない少年は、戸惑いながら自らの名前を伝えようと、息を吸った。

だが少年はあることに気がつき、口を閉じた。

（そういえば、悪魔としての名前は伝えていいのか？ やっぱりここは偽名で・・・）

「アルスだよ・・・。デアールアルス・・・」少年が必死に考えてようやく浮かんだ名前だった。あまりにも変な名前だったので、自分でも驚いてしまった。

「ふーん。じゃあアルスって呼ぶから」姫坂は名前について特に触れなかった。アルスは姫坂の反応のなさに驚いた。普通なら笑ってもおかしくない。

「明日の6時、この宿から真っすぐいった所の広場集合ね」姫坂はそれを言い残し、窓から飛び降りた。

アルスが驚いて窓から下を見ると、姫坂は平然と砂の上を歩いていた。

「あいつも悪魔か何かか？」姫坂の行動にアルスはそう思ったのだった。

＊

約束の6時、アルスはというとまだ夢の中であった。広場では大きなスツケースの上に腰掛け、日傘をさした白いドレスがスツケースと足を触れさせ、コツコツと音を立てていた。

アルスが来たのはその30分後である。アルスは顔を青くしながら広場にたどり着いた。姫坂はというとスツケースの上で小さなポトルに入った水を飲み、目の前の崩れた建物を意味もなく眺めていた。

「悪い悪い。いやあ、宿やおっさんがさ、娘をありがとうってあや」

ガウンと銃声が響き、アルスの足元から煙が上がる。

「言い訳はいいの。行くぞ」姫坂は口調からして怒っているようには見えなかった。

少なくともアルスはそう見えた。

「そうだ」アルスの前を歩きだした姫坂が急に何かを思い、振り返った。

「あなた、今日から私の奴隷か下僕ね。ちゃんと時間以内に来たら友達にしてあげようかと思ったがな。まあ結果遅れたんだ。怨むなら勝手に怨むんだな」

「・・・最悪だ」

少女の奴隷なんかにされる結果になるぐらいなら怒鳴り散らしてくれた方がマシだとアルスは思った。

「さ、行くぞ、我が奴隷のアルスよ」

姫坂はそう言って不気味に笑った。

第4録 寝台列車に咲く紫の謎

「ああ・・・暑い」日に焼ける砂漠の道を汗を流しながら歩いている姫坂が、隣を歩く少年、アルスに聞こえるように呟いた。

「そうかい？ 俺は暑くないが」アルスは不思議そうな顔で姫坂の顔をのぞいた。

「敬語。君はあくまでも私より位が低いんだぞ」姫坂はハンカチで汗を拭いた。そして差しているいる日傘をくるりと回した。

暑いから機嫌が悪いのだろうとアルスは判断した。そしてこれ以上怒らせてはいけないと思い、敬語で謝った。

「で、今からどこへ行くんですか？ いきなり日本ですか？」アルスは棒読みで言った。いくらなんでも同じ年のしかも人間に敬語を使うのは少し抵抗がある。

「イタリア」姫坂はアルスの態度には全く触れず、簡潔にいった。

「イタリア・・・？ どこだそれ？ 日本から近いかな？」

「遠い。ちなみに日本は最後に行く。順番としてはイタリア、イギリスというところかな」

アルスは黙った。人間界での地図は全く頭になく、イギリスがどこかすら分からなかったからだ。下手に聞き続けると、機嫌をさらに損ねそうだからだ。

「見えたぞ。あれだ」姫坂が指差した先には街ではなくトンネル。人が時折出入りしている。

「あれがイタリア？」アルスは首をかしげた。

「馬鹿か君は」姫坂は冷たく言った。

トンネルを抜けて、しばらく歩いた所にイタリアはあった。こじやれた街並みに、人が多く行き来し、活気のある場所であることは初めて来たアルスでも理解できた。

「無事に着いたな」姫坂はトンネルに入る時にしまった日傘をもう一度開いた。

「今から別行動をとる。私は少し用事がある」姫坂はアルスを見上げていった。アルスはいきなりの事態に当然驚いた。

「集合場所はここから1kmほど先にある駅。今は2時半だから3時間後だな。地図も渡す。あと地図に切符がはさんであるからな」姫坂はアルスに小さくたたんだ紙を渡し、ドレスをなびかせながらアルスに背を向けて走り出した。

「おい！雪音・・・！ あー行っちゃったよ！」アルスは吐息をついた。視界から小さくなっていく姫坂を見ながらしばらくその場に立ち尽くした。

「勝手な奴だなあ。まあ俺も人間界が色々見たいし、街でもまわるか」アルスは小さくつぶやいて渡された紙を開いた。切符が挟まっているが、肝心の地図は手書きだったのか、汗でインクが滲んでなにも見えない。

「あのやろう・・・」アルスは眉間にシワをよせて、紙を握り潰した。

＊

アルスが駅に着いたのは5時であった。街の人間に道を聞き、ようやくたどり着いたのだ。街を見ている暇は無かったが、人間を見る暇はあった。

アルスが人間を見て感じたのはどの人間も元気がなく、痩せていたという事である。そして街は砂漠の町と違って平和であったという

事である。

「しっかし雪音遅いなー。もう時間だぞ」アルスが駅の時計を見ると、時間は5時20分をさしていた。

――結局姫坂は来なかった。5時30分ギリギリまでアルスは待ったが、姫坂は訪れなかった。

地図と共に手渡された切符には号室番号と案内図が印刷しており、列車に乗ってから特別、困ることはなかった。

（あのワガママめ・・・来ないってなんだよ。まあ、来なくてもこれでも使って一人で人間界を探索出来るからいいか）

アルスは姫坂の勝手な行動に腹立たしくなり、顔をしかめた。時折すれ違う乗客に変な目で見られたが、アルスは気にせず、自分の号室まで歩いた。

部屋の扉を開けると、聞き覚えのある少女の声がアルスの耳に入った。

「遅い」

声の主は姫坂だった。どこかで買ったであろうお菓子を含みながら窓の外を眺めている姫坂を見て、アルスはため息をついた。

「お前を待ってたんだよ。いつ列車に乗ったんだ？」

「5時だ。後ろの扉から入った」

だからか、とアルスは思った。アルスの待っていたのは後方の扉ではなく前方の扉であり、出会うはずがない。

「まあ、とにかく間に合ってよかった。アルス、他の乗客に挨拶でもしてきたらどうだ？」 姫坂はそう言いながら、おもむろに鞆を漁りだした。

なんで？とアルスは聞いたが、姫坂は行けとしか言わなかった。そして聞いている内に、どんどん機嫌が悪くなり、最後にはアルスは追い出された。

何故そこまで俺を追い出したいんだ、とアルスは思った。しかし追い出された以上、戻るわけにもいかないので、素直に列車の中を歩

きでした。

アルス達以外に、乗客は20人ほどいた。中でも家族連れが多く、一人で乗っているのは、ほんの3、4人ほどであった。それぞれアルス達と同じような部屋にいた。

ただ一人を除いて。

アルスはその特別な一人の部屋は最後に訪れた。その一人の部屋は号車を丸々ひとつ使っており、しかも1番最後の号車であったからだ。

その部屋の前でまずアルスは甘い臭いを感じ取った。部屋には特別号室というパネルがはめ込んである。

ノックをして部屋に入ると、紫のドレスを着た女性がテーブルに顔を伏せていた。

(寝てる・・・?)

アルスは起してしまわないように、立ち去ろうとしたときであった。

「あ? お客さん・・・?」

女性が起きた。女性は椅子から立ち上がり、大きくあくびをした。

「これで2人目ね・・・あいさつに来たのは」

「二人目・・・? 誰か来たんですか?」アルスの質問に女性はお茶を淹れながら、そうよ、と答えた。

「黒い髪の日本人ね。ドレスを着て、色々質問しながら帰ったわ」姫坂だ、とアルスは思った。姫坂以外日本人はいなかったからだ。

一人納得するアルスに女性はお茶を差し出し、また席に座った。

「まあ椅子にでも腰掛けて。立っているのはつらいでしょ? 退屈しのぎに話もしたいしね」女性は自分が座っている椅子の向かい側の椅子を指差した。アルスは浅く頭を下げ、椅子に腰かけた。

「まず自己紹介からが常識よね。私はクロア。クロアIIクロッカス。他の人には言っちゃだめだけど

私はイギリスの王女なの。絶対内緒ね」

そこまで内緒にするなら黙っておけばいいのに、とアルスと思った。アルスはお茶を一口すすった後、姫坂にしたような自己紹介をし、

またお茶をすすった。

「今から帰るところなのよ。お母様がもう長くないみたいで……。せめて最期だけは一緒につてね。このロケットも無事だつてことを見せたいし」女性はどう言いながら首からかけているロケットを外し、アルスに手渡した。

ロケットには長髪の男性2人と、その二人の隣に女性二人と小さな子供が描いてある。この時アルスは何故写真ではなく絵なのだろうと思った。

「これはね、かなり昔に描いてもらった絵らしくてね。何の絵かは分からないらしいけど宝ものだつて言うのを聞いているの」

「宝物・・・」アルスは呟いた。思ってみれば自分にとっての宝物はない、とアルスは思った。

「さて、そろそろかな」女性は立ち上がった。

「ごめんね。ちょっと用事を思い出したの。そろそろ戻ったら？ 黒髪の可愛い女の子のところに」女性は笑顔で言った。

「あ・・・あのこれ・・・」

「ごめんなさいね。忙しくて」女性は無理やりアルスを部屋から追い出した。アルスはロケットを握ったまま扉の前で黙っていた。（おかしい人だ）アルスはロケットをズボンにあるポケットにしまった。そして靴音を鳴らしながら部屋に戻った。

＊

アルスが部屋に戻ると、姫坂はノートパソコンをいじっていた。そして時々くすりと笑い、マウスを動かす。

「あのさ」

「おかえり。どうだクロアは」

「どうだって言われても・・・」

「あやしくないか？」姫坂はノートパソコンを閉じて、アルスに身体を向けた。

「怪しかった？まあ怪しかったっちゃ怪しかったけど」アルスは頭を掻いた。

「最初は暇だからといわれて話をさせられたが、後々に忙しいと追い出されただろ」

「え？お前も？」

「敬語」姫坂がシャープペンを投げた。シャープペンはまっすぐアルスに飛び、ほほをかすめて壁に突き刺さった。

「私も彼女に暇だといわれ話をしたら忙しいと追い出された。どうだ？おかしいだろ？」

（こいつも追い出されたのか・・確かに変だな・・・こいつを忙しいと追い出した後に俺に暇だという・・）アルスはこんなことを考えながら壁に刺さったシャープペンを引き抜いた。壁に穴があく。

「ま、いずれわかるだろう。せっかくの機会だ、お互いについて話でもしよう」姫坂はノートパソコンを手に取り、鞆にしまった。パソコンに新聞が潰されるのがちらりとアルスから確認でき、雑な人間だな、とアルスはうっかり呟きそうになった。

「まずSについて話そう」姫坂はアルスに椅子に腰かけるように椅子を指差した。

「別に知りたくないです」アルスは椅子を引きながら言った。しかし姫坂は続ける。

「Sの由来はseptet。7重奏、7重唱、7人組という言う意味だ。Sの創設者であるアクラハイルは昔7人の家族と共に暮らしていたが、ある日アクラハイルを残し、6人が戦争で死んだ。アクラハイルはその時の家族の人数7人を7人組とまとめてseptet。それと、組織名との関係ははっきり分かってないがSの由来はこれで間違っていないらしい」

「なんでそんなこと知ってるんですか？」アルスは率直に思ったこ

とを告げた。すると、姫坂の顔は曇り、口を閉じた。

「・・・」 姫坂は何かをささやいた。

「え？何ですか？全然聞こえませんでした」 アルスは机に身を乗り出し、姫坂に耳を近付けた。

「昔、Sのメンバーだったからだ」 姫坂は蚊の鳴くような声で言った。アルスは思ってもみなかった答えに驚き、戸惑った。姫坂は下唇をかみながらうつむいている。

「私は昔、親に捨てられ孤児になった。そしてSに引き取られたんだ。Sは孤児をボランティアと偽り引き取って替えの聞く兵士に育てる。私が配属していた時にもその光景を見ていた」

「毎日、Sとの契約を拒んだ国の住民を殺して暮らす。そんな生活を10年ほど続けた。最初は怖かったが拒んで逃げ出すと住民もろとも殺される。しかたなく言う事を聞いて過ごしているとそのうち怖くもなくなった。むしろSに対する反感やストレスをなくすいい相手だった」

「そんなある日、私はある家族をみた。作戦の途中で見たその姿は私の考えを一転させて、自分を正気に戻してくれた」

「ある家族？」

「その家族は父親が子供をかばって死んでいて、母親が泣いて私に助けてくれと言ってきた。私の命はいい、この子だけは助けてほしいってな」

「もちろん私は逃がした。だが私の行動はすべて見られていた。家族は殺され、私は砂漠に捨てられた」

「そんなある日、私はある家族をみた。作戦の途中で見たその姿は私の考えを一転させて、自分を正気に戻してくれた」

「ある家族？」

「その家族は父親が子供をかばって死んでいて、母親が泣いて私に助けてくれと言ってきた。私の命はいい、この子だけは助けてほしいってな」

「もちろん私は逃がした。だが私の行動はすべて見られていた。家

族は殺され、私は砂漠に捨てられた」

姫坂の手にぼたりと涙がこぼれた。アルスは言葉を失う。

「そこからは絶望の毎日だった。毎日毎日砂漠を当てもなくさまよって、1日1日が死と隣り合わせだった。私にあったのはSを消してこんな悲しみを生み出したくないという心。その心だけで私は生きていた。そして私には一つの武器があった」

アルスは武器？と聞き返した。姫坂は頷く。そしてポケットから粉の入った小瓶と、それぞれ色の違う5色の液体が入った瓶を取り出した。

「これはSが作ったある金属を粉末状にしたもので、この液体をかけると姿形を変える。緑が剣、銃が赤、銃弾も赤で作れる。小手が黒、盾などが黄色だ」

へー、と言いながらアルスは姫坂の手から小瓶を取った。小瓶の中の粉は薄い灰色で、少しばかりか輝いている。

「かける液体の量によって武器が変わる。たとえば剣はレイピアになったり、刀になったりする。もちろんRPGで出てくるような剣もある」

アルスはふーん、と反応して瓶に顔を近付けた。そして顔の前で軽く振った。

「どうせなら君にくれてやろう。私のはあるしな」

姫坂の言葉にアルスはマジで！と言いながら、ポケットにもらった二つを入れた。姫坂はアルスがポケットにしまったのを確認すると席を立った。

「夜食を食べに食堂に行くぞ。アルス」

「おお！腹減ってたんだよ！」

アルスは飛ぶように喜んで姫坂と共に食堂まで歩いて行った。

＊

夕食を終えたアルスはベッドに飛び込んだ。姫坂は夕食ののち、姿

を消してそれっきりである。

アルスは姫坂の事を心配しつつも、眠りの世界にいざなわれていった。

アルスが目覚めたのは夜中の3時である。アルスは何故目が覚めたか分からず、頭を掻いた。髪の毛が5本ほど抜けた。うち、2本ほど白髪である。

アルスはふう、と吐息をついた。列車内は全く持って静かで、昼間は気にならなかった、ガタンガタンという列車の音だけが大きく響く。

アルスは向かい側にあるベッドを見た。姫坂の姿はない。

「あいっどこいったんだ……。まさか・・Sが来たのか？」アルスはおかしな想像をした。そしてなぜか窓の外を見た。

窓の外では1つの車両がゆっくりと走っている列車から離れて行く。「まさかな……。ん？」アルスは窓を閉めようとして、その手を止めた。

「なんで……。なんであの車両……。はなれてっぺんだ……。！」アルスが急いで窓を閉め、部屋から廊下に出るドアを開けた時だった。

大きな爆発音が響いた。列車が揺れ、人々のざわめく声が聞こえた。「まさか……。！」アルスは後ろの号車を目指して走り出した。

第5録 紫色の真実

アルスが一番後ろの号車に着くと、そこにあるはずの物が無くなっていた。

「クロアさんの乗っていた車両がない……」

アルスは列車から飛び降り、燃え上がる車両に向かった。車両に近づくとつれて、火薬の臭いが強まっていく。

（火の勢いが強いな……！消火は難しいか……！）

アルスの後ろから「大丈夫か!?」「なにしてるんだ!?」なんていう声が聞こえた。

アルスの後から来たのは中年男性と、若い男性。いずれもスーツを着ている。

「ありったけの消火器を持ってこい！」アルスは叫んだ。来た男性二人は立ち止まり、返事をした後に、今来た道を戻りはじめた。

足で炎を揉み消すアルスの頬に何か冷たい物が当たり、頬を伝わった。

「雨だ……。よし！火が消える手伝いになる！」アルスは笑った。そんなアルスの後ろから聞き覚えのある声が届いた

「姫坂……。今までどこに……!?」アルスは火を消ながら姫坂を見つめた。

見た目に似合わないピンクの寝巻を身に纏い現れた少女はぬいぐるみを抱きながらアルスの後ろにたって、アルスの膝を蹴り飛ばした。アルスは膝から崩れた。姫坂はアルスの後ろから消火器で火を消しはじめた。雨と消火器により車両は真っ黒なその身が見えるまで火が消えた。

「クロアさん！」アルスは焼けて炭となった車両の破片を手でどけ始めた。しかしいくらどけてもその姿は見当たらない。

雨がひどく降り始めた。残っている火が少しずつ消え始める。

アルスがどけている間に、先ほどの男二人が消火器を持って現れた。

男たちは消火器で火を消しながら木片をどけてゆく。

ある程度の火を消したときであった。若い方の男性が何かを見つけて叫んだ。

「これ・・・人じゃないか!？」

その言葉にアルスは探す手を止めた。そして歩いて若い男性まで近づき、肩を落とした。

「クロアさん・・・」

アルスは真っ黒に焼け焦げた死体に触れた。触れた指先が黒く汚れる。

哀しみに浸っているアルスの袖を、姫坂が引っ張った。

アルスは姫坂に視線を向け、袖を引っ張る理由をきいた。

「今から5分後、食堂に大人を出来るだけ集めろ。急げ」

「なんでだ?意味がわからない」

「いいから早く!!」姫坂は叫んだ。アルスだけでなく、その場にいた人間達が姫坂を見た。辺りが静かになり、雨の音と、木の爆ぜる音のみが響く。

「・・・・・・わかった」アルスは列車に向かって走り、列車に飛び乗った。

アルスが姫坂の視界が消えた頃、姫坂はその場にいた男性二人と、ちらほら集まってきた他の乗客に向かって歩きだした。

＊

アルスが乗客十数人を連れて食堂に入ると、姫坂は、かりんとうの入った袋を手にとって、椅子にちょこんと腰掛けていた。

「集めてきたぞ」

「ご苦労様。では変わろう」

姫坂がかりんとうを口にすると、一人の乗客が怒号を浴びせた。

「なんだあ？大事な話しがあるからこいと言われたのに嬢ちゃんが菓子食ってるのか？俺らも暇じゃないんだ。爆発事故が起きて、ガキが震えてるんだ。警察にも知らせなきゃならんし」

他の乗客も続かんとばかりに騒ぎ出した。しかし姫坂は一切反応せず、眠るように頭を垂らし、黙っている。

乗客が怒って帰ろうとした時であった。

姫坂の髪の毛の色が徐々に黒から青に変わっていくのが確認できたと思えば、姫坂は顔をゆっくりと上げた。

瞳の色が蒼に変わっていた。

「さあ、私が今からこの爆発事件の真相を解説します」姫坂は英語で言った。帰りはじめた乗客はその足を止め、姫坂に視線を向けた。「まずこの爆発事件はある国が考えたテロです」姫坂は蒼い瞳を輝かせていった。テロと聞き、乗客がどよめいた。

「しかもその国はイギリス政府です。裏には皆もご存知のSが関わっています。爆発した部屋にはクロア・クロッカスと言う女性が乗っていました。もちろん彼女は死にました」

乗客は人が死んだと聞き、騒ぐ口を閉じた。食堂に重苦しい空気が漂う。

「その人ってあの手首に酷い傷のあった人かしら？」

ドレス姿の婦人が沈黙をきった。姫坂はそうです、と頷く。

アルスも同じ様に頷いた。アルスはクロアの手からロケットを渡された時にその傷を確認したからだ。

まだあの時のロケットはポケットで眠っている。アルスはポケットの中で輝く銀色のロケットを握った。金属特有の冷たさがアルスの手に伝わる。

婦人は悲しそうな表情で「そうでしたか……。あの方がお亡くなり……。」と言った。

「あ、でもわたくしあの方をどこかで見た気がするんですの……」婦人の言葉に姫坂はかりんとうを口に放り込みながら「当然です。彼女はニュースや新聞で大きく取り上げられたほどの犯罪者なので

すから」と言った。

「今から1年程前に児童42を載せたスクールバスが事故を起こし25人を死なせた事を覚えてますか？」

姫坂の質問にいくつかの乗客が知っていると声をもらした。

「彼女はあの事件の運転手。つまり大業務運転過失致死で終身刑となった人です」

姫坂の言葉に若い男がまったをかけた。

「それって確かマリー＝フラネルだよな。だけど・・・死んだのはクロア＝クロッカスって言う女だ。名前が違うじゃないか！」

「もし彼女が偽名を使っていたら・・・？どうでしょう」

姫坂の冷静なる回答に若い男は始めは戸惑いが見えたが、納得したように、口を閉じた。

「しかも彼女の偽名に意味が込められていたら？」姫坂は続けた。数人が意味について問う。

「まず彼女の着ていた服にも意味がある。彼女の着ていたのは紫色の服。そして、それを苗字のクロッカスにつける。紫色のクロッカス。つまり・・・」

姫坂がつまりと云った声に被さるように、先程の婦人が「花言葉！？」と多少大きい声で言った。

「よくご存知ですね。そうです花言葉です。意味は懺悔。犯した罪罰を神仏の前で告白し、悔い改める、という意味です」

「じゃあ彼女のクロアと言う名前は？」婦人がまたもや問う。

「あれは彼女の祖母の名前。今私の隣に居る青年がもっているロケットの中の絵に書いてあります」

姫坂は一息ついて、「皆さん気づいてませんがある重大な謎がありますよ」と言った。乗客はお互い顔を見合わせる。

「何故、終身刑の彼女がここに居るか、と言うことです」

姫坂の言葉に乗客が「ああ！」といわんばかりの仕種を見せた。アルスがため息をつく。

「終身刑の彼女が何故ここにいるかわかりますか？」姫坂はかりん

とうを口に含んだ。乗客は誰ひとりとして答えない。

「むぐ……。彼女は……。フランスの国王の気に入られていたんですよ……。王は彼女を王族のコネで救った……。無期懲役をくら

いながらも牢から出られたんです」

姫坂の言葉に「ちよつとまで!」と白いスーツ姿の男性がまったをかけた。姫坂がかりんとうを食べる手を止める。

「あの事件では彼女はイギリスの人間と公表されていたはずだ!フランスの政府と何の関係が……!」

「それも国王による偽装です。先程も言いましたが私の助手である、この青年が持っている……。ちよつと貸せ……。このロケットの中にある絵、これが証拠になります。この絵には髪の高い男性が写っています。そして16世紀と描かれています。16世紀に髪を伸ばす文化が盛んなのはフランス。つまり彼女はフランスの人間となります」

「そのロケットが偽物だとしたら?」白いスーツ姿の男性がきいた。

「それはありません。この絵はラレールと言うフランスの王族専属の画家のサインが入っていますからね。まあ後々死体のDNAを調べてもらえばわかることなんですけども」 姫坂は紅茶を啜った。

「なら今回のテロも彼女が主犯なの?」婦人が問うが、姫坂は「ちがいます」と呟き、首を横に振った。

「むしろ彼女は私達を助けました」

「助けた? どういうこと! ?」

「実はこの車両には沢山の爆弾があります」姫坂はさらりと言った。乗客の顔が青ざめ、食堂の空気がさらに重くなった。

「仕組みは彼女の部屋にある大きな爆弾が爆発すると、他の爆弾に引火して連鎖爆発を起こす仕組みです」

スーツの男性が戸惑いながら「なら彼女も死ぬじゃないか。彼女は王族お気に入りなんだろう?」

「王達は今回のテロに彼女が混じっていたのは知りません。彼女の意志でこの列車にのり、爆弾から乗客を救ったのです……」

昔犯した罪を償うために」

「それでさっきの懺悔っつーのが繋がるのか」　アルスが口を挟んだ。

「彼女自身は自分の犯した罪を深く後悔し、その自責の念から、自分を傷つける行為まで行いました」

手首の傷はそれなのだな、とアルスは思った。だが口には出さない。「恐らく彼女はこのテロを王宮かどこかで知り、罪を償う場として利用した……」

「なるほどな。そいつは自分の命と引き換えに俺達を救ったって事か」立派なあごひげをたくわえた中年男性が一人で納得した。姫坂がそれに答えるように首を頷いた。

「ちなみに車内にあった爆弾は今、他の乗客達に取り外しにいきます。私が爆弾の取り外し方を教えたので爆発する可能性はありません。安心してください」姫坂の言葉に食堂にいた乗客達は安堵の表情を浮かべ、話し出した。

「これで終わりです。皆さん、帰られても結構ですよ」

姫坂が席を立ち上がると、乗客達は驚き、戸惑った。「もう大丈夫なの!？」「テロリストは乗ってるのか？」等の質問が姫坂に浴びせられたが、姫坂は全て「大丈夫」と言い、空になったカップに紅茶を注いだ。

「姫坂! 凄いいじゃないか!」アルスが姫坂に近寄った。しかし姫坂は黙り込む。

「アルス……これはなまだ続きがあるんや」姫坂が囁いた。アルスは話の内容よりも話し方に驚いた。姫坂はアルスに乗客が居なくなったら話す、と続け、また椅子に腰掛けた。

*

乗客が居なくなり、食堂に姫坂とアルスしか居なくなると、姫坂は一回深く深呼吸した。

そうすると小さいながらも傷ついた手を何度も握りしめ「実はこの事件。私達を狙ったテロなんや」と言った。アルスが内容の前に話しかけになる、と言うと姫坂は冷めた目でアルスを見つめた。

「今は関係ないやろ！私のひとつの特徴なんやから！」

姫坂はアルスから目を背けた。すねたな、とアルスは心で笑った。

姫坂は若干、声を低くしながら「Sの命令でこのテロを仕組んだんや」と言う。しかしアルスが曖昧な返事をしたせいでどうとう黙り込んでしまった。

「そうだ！お前って姫坂なのか？喋り方と風貌が結構違うが」

姫坂は答えない。

「まあ一緒か。ははは！」アルスは一人でぺらぺらと話し出したが姫坂は完全無視である。顔すら合わせない。

「……」アルスは姫坂の怒り方に対し、話すことを止め、黙り込んだ。

しばらくして、「あたしはな・・・姫坂やけど雪音やない。あたしはかのん、草花の花に音で花音や」と姫坂が口を開いた。

「なるほど。じゃあ花音って呼ぶな」アルスはそっぽを向いたままの姫坂花音に優しくいった。

「ま、今あった事は全部大目にみたるわ」

花音は紅茶を飲み干してアルスに視線を向けた。

「ま、今度から注意したらええねん」

「ああ、気をつけるわ」アルスは笑った。花音も微妙に口元を緩めてポケットに手を入れた。

花音はポケットからチョコレートを取り出し、「さて、あたしは雪の奴に戻るか」と呟いた。

ガリッ、という音をたててチョコレートは花音の口の中でかみ砕かれた。チョコレートを飲み込んだ花音は姫坂がかりんとうを食べたときの様に脱力し、頭を垂らした。

「ぐ……花音を出したのは久しぶりだったな……」澄んだ低めの声を発しながら姫坂は顔を上げた。髪の色も瞳の色も黒く変わり、いつもの姫坂であることをアルスは感じ取った。

姫坂は席を立つと、扉に向かって歩き出した。アルスは姫坂が“もどろぞ”と言っているのを背中で感じ取り、その後ろを歩きはじめた。

姫坂が扉に手をかけた時であった。

突然扉が開き、姫坂に黒い筒が向けられた。

「逃げろ姫坂っ!!」

アルスがいち早く叫んだが既に遅く、銃声が響くと同時に姫坂は床に膝をついた。赤い絨毯に血が流れだし、黒くなる。

だが、姫坂が倒れると同時にアルスも動いていた。

アルスは銃を向けている白いスーツの男の前まで移動し、男の腹を殴りつけた。

男はアルスの拳を受け、3歩後退した。口からは赤い血が流れている。

男は口から流れる血を拭い、「へえ……なかなかの力だな」

「なんだお前、なんでいきなり姫坂を撃った」

「テロ作戦失敗したからな、予備作戦だ。まあ、失敗したおかげで俺は死なずにすんでラッキーだ。予備作戦成功させれば王族になれるしな」

男は銃口をアルスに向け、2発発砲した。

「ラッキー？俺と戦うなんて、アンラッキーだろ？」

銃弾をかわしたアルスの拳が男の顔を殴りつけた。

第5録 紫色の真実（後書き）

作者は関西人ではないので関西弁が話せません。

おかしい関西弁になっているので関西の方、不快に思われた方々にお詫び申し上げます。

第6録 U n l u c k y

ぐあっ、という呻きをあげて男は尻餅をついた。鼻からは血が流れ、口は切れて赤くなっている。

アルスは上体を起こした姫坂を見て「大丈夫か姫坂？」

「いたた・・・大丈夫・・・それより・・・」 姫坂はよろめきながら立ちあがった男を睨んだ。

アルスはニヤリと笑い、「あいつのことは俺に任せろ」

拳を鳴らすアルスを見て男は舌打ちした。男の額から一滴、汗が流れた。

「ボスと同じ感じがするな・・・。魔力のジメジメした感じ。お前、人間じゃないな・・・」

アルスは男の言葉にどきりとした。この男は自分が人間で無いこと、悪魔だということに気づいている・・・。

「・・・・・・・・」

アルスは迂闊に発言出来ず、黙り込んだ。動かなくなったアルスを見かねた男が銃を音もなく構えた。

姫坂がなにやってるんだ！と叫んだ瞬間、男の手に構えられている拳銃の銃口から白い煙と共に弾丸が飛び出た。弾丸は姫坂の言葉に反応したアルスの右ほほをかすめて壁に当たった。アルスのほほか

ら生温かい液体が垂れる。

「わるい……。ちょっとな」

アルスは困惑のせいか苦笑いしかできなかった。もし自分が悪魔だという事が解ったら姫坂はどう反応するだろう。気味悪がり、突き放され、また一人になるのか、と考えたアルスは心から動揺していた。そしてその動揺はアルスの考えを奪い去り、自分が置かれている状況に上手く対処できないほどにもなっている。

「そんな感じだと……。やはりお前は人間じゃないな。悪魔……と言ったところか」

男が悪魔と言った瞬間、アルスの体は動いていた。

アルスの拳は男の腹を殴りつけ、男は10mほど吹っ飛んだ。そして列車と列車を分ける扉を突き破り、倒れた。男は腹を押さえながら素早く立ち上がり、落ちていた木片を蹴り飛ばし、自分へと向かってくるアルスを妨害した。

自分の行動がすべて無駄だと知った男は舌打ちをし、窓から飛び出た。ガシャーンという音が列車に響き渡り、異変に気付いていた乗客がぞろぞろと出てくる。

「どうした！？なんかあったのか？もしかして……。犯人がまだ……」

「いやあ……。ちょっと窓ガラスに木が引っ掛かって割れたみたいですよ。特に異変はないですよ」

アルスはとても苦しいごまかし方をした。大半の乗客は首をかしげ

たが、そこにいるのが先ほどの推理少女の近くにいた少年という事で納得したのか、それぞれまた自分の部屋へと戻って行った。

アルスは突然飛び降りるという男の謎の行動を多少不審に思いながらも木片を拾い、窓から投げた。木片が夜の森に消えて行ったのを確認したアルスは吐息をついて姫坂のもとに戻ろうとした。

不意に、アルスの左ほほを何かがかすめた。手で左ほほを触ると、べったり血がついた。かすめた何かそれは、まっすぐにのびた剣。その身は鋭く光っていた。

剣はスルスルと天井に消えて行く。完全に剣が消え終わると、穴が出来た。そしてその穴からは誰かの目がじろりとこちらを睨んでいる。

―まだ生きている。

アルスは椅子を台にし、割れた窓から屋根へと上った。屋根の上は夜の闇に包まれ、何も見えない。しかし木のきしむ音がしているの。誰かがいることだけは確認できる。

アルスは今攻撃されたはいけないと思い、屋根へ飛び上がり、足をついた。雲で隠れていた月が姿を現すとともに、闇に隠れていた男の姿も明らかになった。男の手には先ほどアルスのほほをかすめた剣。その身にはアルスのものと思われる血が付いていた。

男が剣を振りおろして「・・・悪魔なんだろう？お前」

「その質問には答えられない」

「と、言う事はお前は悪魔なんだ・・・」

「・・・・・・・・」

アルスはこれ以上話すのは危険と考え黙ることにした。男の質問には答えず、気にせず。戦う事のみを気に向かせる。

男が剣を構えたと同時にアルスは地面をけり、男に詰め寄った。しかし、先ほどとは違い、剣と拳での戦いだからかアルスの攻撃は全く男には当たらず、逆に男の攻撃だけはアルスをかすめる。鮮血は風に流されて後方へ飛んでゆく。

「どうした悪魔？ たかが人間に苦戦するなんて、風邪でも引いたか？」

「そうかもな……。だからさっさと決着つけて休みてえわ！」

アルスの拳が男の顔を殴りつけた。だが男はその攻撃に耐え、剣を振り下ろした。

剣はアルスの右肩を切った。切れた服の端と鮮血が風に流され闇に消える。アルスは悲鳴を上げ、肩を押さえた。

（あいつのとのリーチの差があり過ぎる……。何か…何かないか…）

アルスはふと、自分のポケットの中のものに気がついた。先ほど姫坂から手渡された武器。

「リバイス……。これがあったか」

アルスはポケットから粉の入った小瓶と緑色の液体の入った瓶を取り出した。

「覚悟しろよ…こっからが勝負だ」

アルスは自信に満ちた顔で小瓶から粉を出した。

粉は風に乗り、消えた。

「あーっ！飛んでしまった！そうか風があるから…。俺で風をガードしないと…」

一人であわてているアルスの頬を剣が掠めた。アルスは逃げるように、男から距離を置く。

アルスは男を指差しながら「お前ちょっと待てよ！俺がなんかしようにしてるのに攻撃するとかバカじゃねえの！？空気読めよ！KYかコノヤロウ！」

アルスは急いで粉を瓶から出し、緑色の液体をかけた。

粉は液体がかかったとたん、固まり始めて姿を変えた。男が呆れた顔でアルスまで走りだした。粉はまだ変化を続けている。

「わー！！早くしろ！殺されるって！！」

アルスまで2mといったところで男は剣を振り下ろした。

金属音が闇夜に響いた。アルスの手にはRPGのゲームに出てくるような剣。もちろんアルスが想像して作ったのである。

「お待たせしました。ここからが本気だぜ」

アルスは力で男を押し返した。男はよろめく。

「いいなこの剣……。我ながら上出来だな」

アルスは、にやけながら剣を吟味した。金色の線が刻まれた剣は月明かりに照らされて輝いている。

「調子に乗りやがって」

男は怒りながら剣を振るう。だが全てアルスが弾き返し、次第に男はスタミナを失い、よろめきはじめた。

「そろそろ決着かな？ 人間様よ」

アルスは勝利を確信し、男に素早く近寄った。そして剣の背で男を突き飛ばした。尻餅をついた男にアルスは剣の先を向けた。

「あきらめな……。ん？」

完全に勝利を確信したアルスに何かが激突した。

アルスは悲鳴を上げる間もなく後ろに吹っ飛び、闇に消えた。

アルスに当たったのは木の枝だった。勝利を確信し、油断しすぎたアルスは目の前に気を配らなかったので、自分に迫ってきた障害物に気がつかなかったのだ。

「うぐぐ……。ちくしゅう……。」

アルスは鼻血を流しながら列車の溝に掴まっていた。剣は衝撃で手放してしまい、アルスの手元にはない。

何とか起き上がったアルスは先程の場所まで戻った。何度か木の枝に当たりそうになった。

「んあ？生きてたのか」

「そんなヤワな体じゃないんでね」

強がるアルスだが、やはりダメージは大きく、足元はおぼつかない。それに加えて武器もない。

風に吹かれてふらふらとしているアルスを見て男は呆れ口調で「ふらついてるぞ？大丈夫かあ？」

アルスは言葉を返さず、ふらつく足で男に殴り掛かった。男はいとも簡単に避け、アルスの腹を剣で貫いた。アルスは獣の様に咆哮した。

男はアルスを蹴り飛ばし、アルスを転ばせた。地面に仰向けの状態になったアルスの首から数？横の所に剣を突き刺した。

「終わりだな。悪魔ともあろうものが人間に負けるなんてな」

アルスは朦朧とする意識に死を覚悟した。だが目の前に微かに見えるある物を見て口元を緩めた。

「目の前注意だせ」

アルスの言葉に男が振り向いた男は悲鳴を上げた後、鈍い音を鳴らしてアルスの視界から消えた。

「アンラッキーだね。俺は木の枝に当たったけど、お前はトンネルだったね」

真っ暗なトンネルを走る列車の屋根で、アルスは一人、笑っていた。

列車がトンネルを抜けた後、アルスは先程の窓から車内に戻った。ちょうど前を通った女性に叫ばれたが、アルスは意識が朦朧としていてあまり聞こえてはいない。

部屋に戻ると、姫坂が一瞬驚いて体をびくつかせたが、入って来たのがアルスだと解ると、泣きそうな顔をした。

しかしすぐ顔を背け「ボコボコじゃないか。弱いな君は」

アルスは姫坂の態度に、クスリと笑った。

―ドサリ

アルスはそのまま床に倒れた。姫坂が倒れた音に反応し、アルスに駆け寄った。

「アルス！やばい、出血が多い・・・！誰か！誰かあ！」

姫坂の叫ぶ声が闇夜を駆けける列車に響き渡った。

第7録 人格

「どこだ・・・ここ」

よくある台詞を吐いたアルスが目覚めたのは多くの白いベッドが並ぶ病室。顔を横に向けると腹部に包帯を巻いた姫坂がうたた寝をしていた。

「なるほど・・・運んでくれたわけか」

アルスは視線を天井に戻した。天井に大きなシミがついているのが目に入った。それはあまりにも濃く、まるで穴のようだ。

「・・・んあ。ああ・・・起きたか・・・」

姫坂は大きくあくびをしながら言った。アルスは姫坂の方に顔を向ける。

「気絶していたから分からないかも知れないが、ここはイギリスにある病院・・・。勿論私が運んだ」

「そうか・・・ありがとな」

笑顔で礼を言われ、姫坂は、その小さな頬を朱に染め、顔を背けた。

アルスは上体を起こして「さあて・・・行きますか・・・」

それを聞いた姫坂はすぐに顔をアルスに向けた。アルスはベッドから降り、近くに置いてあった自分の服をとった。

「ちょっと待て。君まだ傷が・・・」

アルスは白衣を脱ぎながら「傷がなんだ？」

そう言ったアルスの身体には傷一つついておらず、姫坂は目を疑った。

アルスは白衣をテーブルに投げると、自分の服を着はじめた。

「俺は傷の治りが早いんだよ」

「いや・・・早いつてレベルじゃないぞ・・・まるで人間じゃないみたい・・・」

そりゃ俺は人間じゃないからな、アルスはそう口をこぼしそうになり、慌てて口を閉じる。もしここであればしまえば姫坂に嫌われてしまうであろうと思ったからだ。

「んなことどうでもいいんだよ。旅の速度遅らせちゃったから遅れを取り戻さない」と

アルスは行くぞ、と言いながら自分の胸の高さぐらいしかない姫坂の頭を撫でて、部屋を出た。姫坂は舌打ちをしてその後を追った。

第7録 戦慄の始まり

病院の外では雨がざあざあ降っていた。灰色というより黒に近い空から滴る多量の滴は道端に幾つも溜まり、大きな水溜まりを作っ

ている。

病院の玄関で立ち止まり、空を見ているアルスの後ろから傘を二つ持った姫坂が病院から出てきた。姫坂は無言でアルスに傘を渡すと、自分の持つている傘をさし、歩きだした。アルスも傘をさしてそのあとを追った。

アルスは姫坂の態度から、姫坂は怒っているんだなと思った。しかしその怒りの理由は分らない。身を心配して引き止めてくれたのに、無理矢理出してしまったからなのか、それとも他の何かなのか、全く理解は出来ない。

「・・・なんで怒ってるんだ？」

思い切ってアルスはきいたが、姫坂は答えない。黙ったまま雨の道を進んで行く。

アルスはため息をついて今度は敬語で聞いてみたが、相変わらず返事はない。それどころか水溜まりを強く踏み、アルスに水滴をかけたので、アルスはムツとした。

ムツときたアルスは姫坂から数メートル下がって歩いた。

しばらく無言で歩いていたアルスはすれ違いさまに赤いドレスの女性にぶつかってしまった。アルスはすぐに立ち止まって謝罪したが、ドレスの女性はそのまま行ってしまった。

（なんだよぶつかって。謝りもしないなんて）

アルスは姫坂の事もあり、不機嫌が増した。若干、雨のせいもある

かもしれない。

・・・ああ最悪だ。

アルスは小さく呟いて再び歩きだした。足を一步踏み出したアルスはふと自分のポケットに緑色の封筒が入っていることに気がついた。

封筒の中には英語で長い文が書かれていた。訳してみるとこんな文が出来上がった

“ マッコイ生誕記念日祝賀会招待状 日時 10月21日 午後2時
場所 ロンディニウムグランドホテル 皆様のご参加。お待ちしております。
”

アルスは手紙を一通り読み終えると、不本意ではあるが、姫坂まで走った。

アルスが話しかけるだけでは姫坂は反応しなかったが、招待状を見せることで姫坂はようやく反応した。姫坂は手紙を読み終えると、再び無言で歩きつづける。

アルスはため息をついた。何で怒っているかは分からない、だが自分が何かをして姫坂の機嫌を損ねたのは確かである。

謝らなくては。

「あのー姫坂さん・・・？何で怒っているかは分からないけど・・・」

アルスは姫坂に並列する形になり、顔を覗く。

―ごめんなさい

姫坂は無言だった。アルスの謝りには応じず、何事も無いように無言で歩きつづける。

「あーもう！知らねえ！こんなバカ！謝っても無視！もう知らん！」

姫坂は怒りだしたアルスに驚き、アルスを見上げた。そして何かを喋ろうと口を開いたが、閉じた。

アルスは手紙の地図を思い出しながら走り出した。

もう知らない。こんなやつ。

しばらく走って着いたのは綺麗なホテル。もう始まっているのか、人は出入りしていない。

アルスは着いてから気がついた。姫坂が招待状を持っていることに。だが姫坂を待って一緒に入るなんて気まずい。自分から突き放して走ってきたから。

アルスは考えた。考えに考えてある作戦を考えた。

アルスはその作戦を決行するために建物の裏に行き、誰も居ないことを確認すると、鍵の掛かった鉄のドアを無理矢理開けた。幸い入ったところにも誰も居ない。

アルスは素早く声のするところに移動した。声はある扉に近づくにつれ、より大きくなっていく。

扉をあけると、その先には大勢の人がパーティをしていた。

「コラッ！君！こんな所にはいっちゃだめだぞ！」

アルスは突然、後ろから怒られて驚いた。後ろに居た警備員風の男性にアルスは会場に連れ込まれて、「あの場所は従業員専用だからもう入るなよ」と言われてその場に置いて行かれた。アルスは呟く。

ラッキー、と。

＊

アルスが上手く会場にもぐりこんだその建物の外では姫坂が周りを確認しながら入場手続きをしていた。姫坂の頭の中ではアルスの事がいっぱい浮かんでいる。あんな冷たくしなければよかった、アルスは自分を嫌いになってしまった、と後悔していた。

会場に入るとまず飛び込んできたのは沢山の料理。事件のせいでもともに食事が味わえていない姫坂の腹の虫が鳴る。

「はいどうぞ」

腹の音に気付いた一人の赤いドレスを着た女性が姫坂に食事の盛られた食器を渡した。女性は、「まだ口をつけてないからね」と言い残してその場を去る。

姫坂はしばらく皿を持って立っていた。女性がみえなくなると、そ

の食事を食べた。

黙々と食事を食べていた姫坂は突然襟を掴まれた。突然の事に姫坂は食事を落としてしまった。

「だあれだ！こんなガキをここに連れてきたのはア！」

姫坂を持ち上げたのは一人の中年男性だった。眉間にしわを寄せて怒る中年男性に姫坂は不快感を抱き、その手を払った。払われたことにより、男性はより一層怒る。

「このガキィ！」男性は拳を振り下ろした。辺り一帯がざわめく。その中で姫坂はポケットからあるものを出して食べた。

姫坂はその振り下ろされた拳をガッ、と受け止めた。

「おじさん、子供に手を挙げるなんてひどいと思わないの？」

姫坂の髪は徐々に赤に染まっていく。そして完全に髪の色が赤に変わると同時に、姫坂の拳が中年男性の腹を殴りつけた。男性は唾を飛ばしてその場に倒れる。

「おじさんごめんなさい。でも子供に絡むのは良くないよ」

姫坂の目の色は赤に変わっていた。周囲の人間は驚き、どよめく。

「もう！あの人ったら！」

姫坂の後ろから声が聞こえた。後ろから現れたのは先ほど食事をくれた女性。

「もう！バカな事して！恥ずかしいじゃない！」女性は中年男性を引っ張って別の部屋に消えた。辺りが沈黙に包まれる。

そんな中で姫坂は何事もなかったかのように歩きだし、食器を拾ってもつたいないと呟いた。そして食事を盛るために、歩いて行った。

「わぁ…おいしそう！」赤い髪の姫坂は沢山の料理を目の前にし、目を輝かせた。そしてその小さな身体からは想像できないほどの量をすさまじいスピードで食べ始めた。

少女の行動にざわめく会場、そのざわめきに気付いたアルスが現場に駆け付けて行った。

「ひ・・・姫坂っ!？」

アルスは姫坂を見て悲鳴を上げた。まるでどこかの少年漫画の主人公のように食べ物を食べる姫坂。その姿があまりに怖かった。

「ちょっとこいつ！」

「あ、アルスさんだ」

アルスは姫坂を無理やり引っ張って会場の隅に移動した。多くの人間達がこちらを睨んでいる。

「とりあえず聞くが、お前は姫坂雪音？」

「ひはうほ！わはひはふえはは」食べ物を食べながら赤い髪の雪音は答える。そんな姫坂にアルスは「違うな、誰だお前は」と呆れ口

調で言う。

食べ物を飲み込んだ姫坂は「私は姫坂の人格のひとつで、陽菜って名前。よろしくね!」

「姫坂は2重人格者じゃなくて3重人格者なのか…」

「違うよ」

頭を抱えるアルスに陽菜がいった。

「雪音は4つの人格を持つ4重人格者! 雪音と花音と私、そして禁断の人格のネグロ」

「禁断の人格…?」アルスは訊いた。

「雪音がSに居たところに、無理やり開発された人格で、主に殺戮と破壊を目的とされた心のない人間兵器、それがネグロです」

第8録 戦慄のパーティー

「ね…ネグロって… 禁断の人格って…」

「ネグロだけは、とても意志が強くて隙あれば雪音さんを乗っ取ろうとします… もし乗っ取られることがあればもう終わりです」

「雪音さんはSでも3番目に優秀だった兵士… つまり、すべての肉体のステータスがケタはずれに高いんです」

「そんな雪音さんのステータスを3倍したほどの力を持つ…それがネグロです」

「そんな恐ろしい人格が出てきたら俺が倒す。 戦闘には自信があるんだ！」 アルスは自信満々に言った

「戦ったらだめです！ あの人は雪音さんではありませんが体は雪音さんです！ ダメージは雪音さんに蓄積するのです！」

「じゃあ…どうすれば…」

「出てこないことを祈ることぐらいしかできません…」

雪音のもう一つの人格はその赤い髪をなびかせながら拳を握りしめ、悔しみをあらわにしている

「私はネグロについてはあまり深くは知りません… 雪音さんに代わります」

赤い髪の雪音は中からチョコレートを出して頬張り、雪音に交代した
「…陽菜に代わると私のイメージが崩壊するな… 怒り任せに変わるのはやめておこう…。それとさっきは済まなかったアルス…」

雪音は少し顔を赤らめ、そそくさとホールへ向かって行った、その姿をアルスは心の底で笑いながら付いて行った

ホールへ行くと、たくさんの人がステージ付近に集まっていた その中心では女の人がマジックショーをやっていた

「さあ！ このボンドや接着剤などを付いていない紙があります！ その紙を少しだけ重ねてこの銃の形をした道具を当てるとですね

…」

「くつついてしまいます!!」

マジシャンがくつついた紙をペラペラとやると拍手が挙がり、机の上においてある帽子にお金を入れる人が続出した

「Thank you 皆さま! それではマジックショーはここで終わりです!」 女の人は帽子の中のお金を鞆に入れ、ステージから去っていった

「へえ…接着剤もないのに紙と紙をくつつけるなんて…不思議だね…」

「もぐもぐ…簡単なタネだ…君には教えてあげないけど」 雪音はいつの間にか、皿に料理を盛って食べていた

「俺も食べよ…」アルスは食事を取るため、皿を取りに行った皿を見つけたアルスは皿を手に取り、料理をつごうとした。

その時だった。

「バチッ」という音と共に右手に激痛が走った

「いてっ!!…これ静電気…? なにも触ってないのに… おかしいな」 アルスは痺れる右手をさすりながら雪音の元まで戻っていた。

「はあ…今日はなんだか…不幸だなあ…」 アルスが肩を落としたがら雪音に愚痴ると雪音は澄ました顔で嘲笑うような声で言った。

「知るか」姫坂は冷たく言った・

突然、ホールの照明が落ちた ホールにいた人たちは拍手をし始めた

「皆さん! お待たせしました! 今回のパーティーの主催者であり、発明家でもある マッコイ様です」

そんなバカでかい放送が響いた後にステージ横から80歳代の男性が出てきた

「なお マッコイ様は心臓に機械を付けておられるので電波の飛ばせるものもしお持ちになっっている方がいればすぐ係員に預け出てください! まあ入場時に全員確認しているので大丈夫かと思いま

すが」

そんな放送が響くと、雪音の手が止まり何かを考えているような顔になった

「どうしたの…？」　とアルスが聞いても雪音は答えてくれなかった。

「おい…　雪音？」　アルスが雪音の肩に手を置こうとした時だった。

「バチッ」という音とともにまた激痛が走った。

「また静電気…なにも触れてないのに…」　アルスが手をさすったその時だった。

ステージ上で女性の悲鳴が上がった。　見てみるとマッコイが倒れている

放送が震える声で響いた

「み…みなさん…落ちついて…落ちついてください…！」

「え…なにが起こったんだ…　マッコイさんの悲鳴なんて聞こえなかったぞ…　ねえ雪音…」

「みんな動くな…！！！！」　放送にも負けないぐらいの雪音の大声が会場に響き渡った

雪音の目の色は青くなっていた　つまり花音に変わっているのだ

「あなた！　どうしたの！」　ステージ横からさっきマジックをしていた女性が出てきた。

どうやらマッコイの妻のようであるとアルスは思った。

「医者を…医者を呼んでちょうだい！　付き添いの医者は何をしているの…！」　女性が大声でステージ横に向かって言った。

「も…もうしわけありません！」　医者がすぐにステージ横から飛び出してきた

医者はすぐにマッコイのもとに行き、脈をとった

医者は首を横に振った。　マッコイは死んでしまったのだ

「そんな…　あなた…」　女性は泣き崩れた

「医者！　メンテナンスはしていたの…！」　女性がすさまじい

形相で医者をにらみながら言った

「は：はい！ 間違はなく異常はありませんでした！」 医者が青ざめた顔で答える

「じゃあ：なんで夫は死んでしまったの！？」

「わ：わかりません： 突然のエラーが起こってしまったとしか：
でも：突然エラーが起こったとしても急には停止しないので、
多少苦しむはずなのですが：」

「なんか：事故みたいだね： 雪音が花音に変わった意味あるの？」

「ある：これは事故じゃない： 殺人だ：」 花音はその青く澄んだ目でステージを見ながら言った

「さ：殺人だなんて：どうやって？ アッカーソンさんには誰も触ってないし、銃声も聞こえなかったし：」

「今からそのすべてを話す：」 花音はステージへ向かった。アルスもそのあとを追った

「とにかく！ 医者！ あなたが夫のメンテナンスを怠ったとしか言いようがありません！ あなたを訴えさせてもらい：」

「まっってくれ！ 医者は悪くない！」 花音が間に入った。

「あなた：なんですの：？ おふぎけにもほどがありますよ：： これは100%医者の過失： それ以外に何があるんですの：？」

女性の声質、しゃべり方から女性のいらだちがうかがえる

「殺された、としか言いようがない」

「ころされた：ですって：」

興奮し、冷静さをかいている女性に対し、花音は冷静にうなづいた
「じゃあ：教えてもらおうじゃないですか： 夫を殺した殺人鬼を！」

「静電気」

「静電気ですって？」 女性は眉間にしわを寄せた。

「そう、静電気によって彼は死んだ。そして犯人も貴方だ」

花音はため息をついた。

「先ほどあなたが見せてくれたマジック。あれは静電気によって紙をくっつけている。その道具を使った」

「あなた、たかが静電気ごときで死ぬと思ってるの？」

「いいえ普通は死にません。でももしあなたがあれを改造していたらどうでしょうね。今から調べて来ますね」

花音が歩き出した時だった。銃声が響き、花音の右肩から血が飛びちった。

「…その必要はないわ…」

右肩を押さえて女性を睨む花音に、再び銃口が向けられた。

「このパーティーも事件もすべてでっちあげだから」

女性は発砲した。花音は銃弾を横にかわす。

「ホントはこのパーティーはねえ！ あなた達を殺すために作られたパーティーなの！」

女性はアルスを指差して「その男：アルスとか言ったっけ？ あなた街で人にぶつかって 招待状拾ったでしょう…？ あれも計画の1つ！ あなた達をこのパーティーに招くためにね！ 他にもあなた達をパーティーに招く作戦は13個ほど用意してあったの！ その中でも1回目の作戦に引っ掛かってくれてラッキーだったわ！」

女性は手を広げて「私はSの攻撃部隊 第49部隊、隊長イズベルカ！ そしてこのホールにいるやつらは人間型の零！ ざっと30体はいるわ… お前ら2人ともぶっ殺して社長にその首をささげる！」た

「私は零を破壊する！ 君がやると爆発しかねない！ 君はイズベルガを倒せ！」

いつの間にか雪音に戻っていた 相変わらず状況判断能力が早い雪音は鞆から瓶と袋を液体の入った試験管を出し、瓶を開けて中の粉を振りまいた そして試験管の液体を振りまいた

粉と液体は、長い剣に変わった

雪音はステージから飛び降り、木の葉のように舞いながら零を切り裂いてゆく

「よそ見していいの？」 イズベルカが持っている槍がアルスの顔をかすめた

（あぶねえ…それにしてもこいつどこから槍を出したんだ…まあ、とにかく…こいつを使う時が来た…）

アルスもポケットから適当に粉の入った瓶と液体の入った瓶を取り出した

さっき雪音がやったように粉をまいて水をかけた

かけた液体の色は黒だった。

粉は液体と混ざり、固まった 出来たのは赤い小手だった

「おい！ よりによって手につけるものかよ！」

「なにくだらないことやってるのよ！」 イズベルカが突いた槍がアルスをかすめる

アルスはイズベルカの槍をかわしながら小手を手にはめた

イズベルカは容赦なくアルスを襲う

その小手をはめた手が偶然、槍に当たった

何もしないが小手から電撃が発せられ、槍を伝ってイズベルカに伝わった

「ああああっ！」 悲鳴を上げ、イズベルカは槍を離し、地面に倒れこんだ

小手を見てみると、中心に矢印のようなものがり、それをかこうように丸が書いてあった

そして丸の中には十字線が書いてあり、それぞれの先に風、氷、炎、ジェントアグア ジャマ トウルエノ雷と書いてあった

現在、矢印は雷のほうを向いていた

「もしかして…」 アルスは炎に切り替え、イズベルカの近くにある槍をつかんだ

槍はドロドロに溶けた、恐らくもう使えない

「俺の勝ちだ！ イズベルカ」

第8録 戦慄のパーティ（後書き）

ずいぶん昔に書いたものなので、文章がめっちゃめっちゃになっていきます。申し訳ありません

第9録 過去

「終わりだ！イズベルカ」 アルスは勝利を確信しイズベルカに近寄った時だった

何か大きく黒い物がアルスに直撃した

「ぶほっ！」 アルスは倒れ、いきなり飛んできたものに潰された
「おおと…すまないアルス ま、君がそこにいたのは知っていたがな」 ぶつかってきたのは雪音だった

「まだざっと零は17体は居るな…この私ではもう無理か… あれ？ イズベルカはどこに行った？」

「え？ あれ？ 居ない！ どこに行った？」 あたりを見渡し
てみると、確かにイズベルカの姿はどこにもなかった

「逃がしたのか…君は本当に使えないな」 雪音はふう、とため息をついた

「まあ…やられなかっただけいいか 私が指示するからアルスも零を破壊したまえ」 雪音はそう言って、ステージからひらりと飛び降り、また零を切り裂いて行く

アルスも、その後を追おうと、ステージから飛び降り、雪音と共に零を破壊しようとした時だった

「どこにいくの！」

イズベルカの声があった。二人が振り返るとステージに立っていたのは先ほど逃げたはずのイズベルカが何かを持って立っていた

「へえ…お前…逃げてなかったのか…」

「そんなはずないでしょ…これを取りに行ってたのよ」 イズベルカが手に持っていたものを掲げて見せた

「これは零に搭載されている爆弾を爆発させるための起爆スイッチ…
こうなったらこの街ごと消して、あんたらを殺してやる！」

「え… ちょっとまで！ お前そんなことしたら街の皆が…」

「そんなこと知らないわ！ さあ、終わりよ！」 イズベルカが爆弾のスイッチに力を入れた

「やめろおおおおおっ！」 アルスはステージに向かって走り出した

（走っても間に合わない！） アルスがあきらめかけた時だった何か細長いものがアルスの後ろから追い抜いて行った。それはイズベルカの持っているスイッチを貫き、壁に突き刺さった

「あれって剣……」 アルスは、はっとして後ろを振り返った剣を投げたのは雪音だった

「街の人が犠牲になっても知らないだって？ ふざけてるの？」 その雪音の声は今までに無いほどの怒りを感じられた

「そんな考えをしてるから 葵ちゃん達が死んだんだ！」 まるで獣の咆哮のように大きい声だった

あまりに大きい声だったのでイズベルカもアルスも後ずさりしたかなりの怒りをあらわにしている雪音だが、その目にうっすら涙が浮かんでるように見える

「はぁ？ 何？ アオイ？ 誰それ？ あんた何言ってるの？」 イズベルカは汗を浮かべている

「葵は私の友達だった……優しい子だった……なのに……」雪音が話している途中にまだ壊れていない零が5体ほど、雪音に飛び掛かったが雪音は、なんなくかわし、飛びかかってきた零達を真っ二つにした

「アルス、人間型零が搭載している爆弾の位置は胸だ、腹を切れば爆発しない」 雪音はゆっくりステージに向かって歩き出した

「私はあのバカ女を始末する」 その目は黒く、別の人格になっているようには見えなかったが、雪音には、まるで見えなかった

「腹ね……分かった任せろ」 アルスは心配だった 雪音が過ちを犯さないかが

アルスはポケットから粉と緑色の液体が入った瓶を取り出して、混ぜ、剣に変えた

アルスは零達に向かって走り出した、そして零の攻撃をかわしながら、確実に零の腹を剣で切り裂いて行く

「お友達にまかせちゃうんだ： 爆発しないように祈ることね」

ホールで零達と戦っている姿を遠目に見ながらイズベルカが言ったその手にはさきほど雪音が投げた鋭い剣が光っている

雪音は何も言わず、イズベルカに切りかかった、イズベルカは剣で受け止め、雪音を蹴り飛ばした

「シカトはないんじゃない？ 友達居なくなるわよ？」 イズベルカは、にっこり笑って言った

「五月蠅い：」 雪音はポケットから拳銃を取り出し、2発イズベルカに向かって撃った

弾丸はイズベルカをそれ、地面に当たった、それと同時に雪音は走り出し、イズベルカの顔の前までいつきに詰め寄った

イズベルカもさすがに焦ったのか大きく剣を振った、雪音はその剣をかわし、イズベルカにすさまじいひざ蹴りを食らわせた

イズベルカは2mほど飛び、吐血した

だが雪音は相変わらず、攻撃の手を止めない

銃口を向け、3発撃った

その弾丸の1つはイズベルカの腹部に当たった、悲鳴をあげるイズベルカに雪音は剣を振りあげた

「死ね 下衆」 雪音の低く、冷たい声が響き、剣が振りおろされた

第10録？

振りおろされた剣がとらえたのは地面だった。とらえた地面は間違
いなくさっきまでイズベルカが居た所だった

殺人という過ちを犯そうとした雪音を止めに入ろうとしたアルスは
驚いたが、一番驚いたのは雪音だった

「イ：イズベルカはどこに…？ さっきまでここに…」 その声と
重なるように女性の声が聞こえた

「雪音：あなたのその怒りで我を忘れると言う癖を止めると私は前
注意したはずだが… まったく直ってないな」

氷のような冷たい声と共に、真っ赤なドレスを着た女が降りてきた
降りてきた女はさっきの騒ぎの中にいた赤いドレスの女性。

雪音は目を見開き、かなりの驚きを表していたが、すぐに落ちつい
た表情に戻った

「さっき会った時は誰かわからなかったが…相変わらずその機械み
たいな冷たい声は昔から変わっていないな アビー…」

「私のしゃべり方は誰かを傷つけたりはしません、あなたのその
癖は他人を傷つける可能性があります、これは上司からの命令です
その癖をなおしなさい」

「お前を上司として慕っていたのは過去の話…今はただ殺すための
標的にしかすぎんよ」

アビーはそう、と言いたため息をついた

「しかし、あなたは私を殺すことはできません、しかし、私もあな
たを殺すことはできませんが」

「さっき聞いた作戦では私たちを殺すことだと聞いたがな」

「作戦は失敗し、そのため作戦は変更されました ある発見があっ
たので失敗したのはこちらにとっても好都合でしたが」

「発見？ いったい何の発見だ？」

「残念ながらその質問には返答することが出来ません」 アビ

ーが首を横に振った時だった

アビーの携帯の着信音が響いた、アビーは携帯を取り、何者かと何かの確認をするような返事をした、そして携帯を閉じた

「社長から撤退命令が出ました　では…」　アビーはそう言って、イズベルカを横に抱えたまま、ステージの横にある出口に向かって歩き出した

「さて！　アビー！　逃がさないぞ」　雪音がアビーに駆け寄った時だった

ガシャアアアアアン！という音が響き、上にあったシャンデリアが雪音の前に落下した、舞い上がる埃を振り払いアビーが居た方向を見たが、もうアビーの姿はなかった

雪音は舌打ちをし、ステージから飛び降りた。ステージの中心には零を全て破壊したアルスが腰かけていた

「逃げられた　まさかアビーがいるとは思わなかった」　雪音はくしゃくしゃになった髪型を鞆から出した「くし」できれいに直した「そうか　よかった」

「よかった？　なんでだ　逃げられたんだぞ」

「君が殺人という過ちを犯さずに済んだから」　アルスは初めて雪音の目をにらみながら言った

「くだらん：　戦場では敵を殺す事を目的としている　過ちだとかなんとか言ってる暇はない」　雪音は机の上にあったお菓子とワインを鞆に押しこむと、出口に向かって歩き出した。アルスは無言でそのあとをついて行った

外に出ると、広がっていたのは淀んだ心をきれいにするような青い空：ではなく真っ黒な雲が隙間なく敷き詰められた空だった

「これからどこに行くんだい　本部にでも乗りこみにいくの？」

「乗り込みに行くのには違いないが、本部にはいかな　行くのは支部だ。以前アビーが配属していた部隊がイギリスにあった　アビーがまだここにいると言うことはまだ支部がある可能性が高い」

「幸いここからも近い　歩いて3時間というところか」

「近いかな それ 遠くない？」

「途中で休憩を交えて行くぞ 体力的にも疲れているからな」
2人は支部に向け、歩き出した

＊

「ね、聞きたいことがあるんだが」 アルスはいきなり話を切り出した、雪音も「なんだ？」と返答した

「君、ホールにいた時に「葵ちゃんは優しい子だった」 って言っただけど、葵ちゃんって誰？」 アルスの質問に対し、雪音は下を向いて、しばらく黙った。 10秒ほど黙ったあと、とても小さな声で言った

「葵ちゃんは私がSにいた時の唯一の友人だ… だが作戦途中に市民の抹殺に巻き込まれ、死んだ。 その時からだネグロという負の人格が生まれ始めたのは」

「やつらは私の中に生まれた負の感情を見逃さなかった、やつらはある日私の食事に毒を盛り眠らせた。 そして負の感情を人格として目覚めさせるための改造をした」

アルスは雪音の過去を聞き、黙ることしかできなかった。 かける言葉が無かったからだ

「だが、幸いにも私は途中で目覚め、ネグロを完全なる人格にすることはできなかった。 だからネグロはこうやって私の中で抑えられ、眠っている」

辛い過去を言われ、黙っていたアルスを見て、雪音は優しく笑った。そして優しく語りかけた

「さ、 少し休もう。 もう2時間ほど歩いた、目的地も近いから色々準備をしよう」

過去とは違う別の話をしてくれたので、アルスは雪音によろやくアルスは声をかけることができた

「や…休もうって… Sはいつ俺たちを狙ってくるか、わからない

んだ のんびりしてられない」

「アビーが言っていた 私たちを殺すことができない とな。だからやつらが直接私たちに攻撃を仕掛けてくるのはありえん 大丈夫だ」 雪音は近くにあったパンフレットを手にとった

「ここの宿なんかどうだ 1泊1万 二部屋とっても2万 部屋もきれいで、食事も付く ここから20mほど先にある。」

宿に着くと、雪音はサクサクと手続きを済ませ、アルスに部屋のカギを渡した

「君は103号室 私はその隣の104号室だ 何かあったら来いやましいことで来たらぶっ殺すからな 食事は7時にここのレストランに來い」

アルスは生返事をして、部屋に行き 寝た。寝ることで傷をいやすためだ

しばらく眠ったところで電話が鳴り響いた。アルスは電話の主が雪音だろうと思い、電話を取った

しかし電話の相手は雪音ではなく、男の声だった

「デアールアルスだな… いやウェルギリスールシファーか…」 男

の口にした名前にアルスの顔が一瞬で青くなった

「な…なんで俺の名前を…」

「私はあらゆることを知っている 例えばお前が悪魔だと言うこと、情を持っていること、日本に行きたがっていること、友人がある会社を倒すために旅をしていること、友人の親の消息、なんでもな…」

「私の名前はアヴニール 少し話をしよう 時間は大丈夫か」

「…大丈夫だ 話を続けてくれ」

「まずだ 君は今からSの支部に行くのだろう 行くのはいいが戦うな。死ぬことになる 君が乗り込むべき場所は本部だ。場所は知っているかね？」

「知らない 雪音も知らないからな 今からいく支部で聞こうと思っていた。でも死ぬなんて心外だな、なぜ分かるんだ 俺たちが死ぬってことが」

「言っただろう 私はあらゆることを知っている…と 本部の場所を教えてやる、支部にはいかず本部に行け、本部は日本だ 日本の東京という都市にある。行き方も教えてよう」

「Sの支部の隣の廃ビルの地下に通路がある。そこからSの支部に入るんだ。通路に入ると飛行船がある、それに乗れ、本部行きだ」

「お前の言うことは信じられない あまりにも虫がよすぎる」

「嘘だと思わないならいぞ信じなくても、Sの支部に行き、殺されるがいい。忠告はした ではまた会えるといいな」

「ま…まで！ まだ聞きたいことが…」 アルスが止めると同時に電話はぷつりという音とともに切れた

「なんだったんだ あいつは…なんで先のことを知っていて、俺の名前も知っているんだ…」

また電話が鳴り響いた。

「おい！ アヴニールか！ さっきの続…」 アルスが大きな声で電話に話したが、電話の相手は男性ではなく透き通った子供の声だった

「何を言っているんだ 寝ぼけているのか？ もう7時だぞ レストランの前で待ってるからな 早く用意して来い」

（レストランでさっきの話をするか…もしかするとアヴニールは雪音の友人かもしれないからな…）

アルスはレストランに行き、雪音に全てを話した。雪音も話の内容には驚きが隠せなかったがすぐに得意の冷静さで話をまとめた

話の結果、2人はアヴニールの話を信じ、本部に向かうことにした

第11録 突入

「あしたの9時が約束の時間だ。本部は私も言ったことが無いから分かんが、おそらく戦いになる。アヴニールは支部では戦うなどいっただけで、本部や飛行船で戦うなどは言ってない。それだけは覚悟しておいてくれ」

「戦い以外に話がつきそうな集団だからね もともと戦うことは承知の上だよ」

「あと、戦場では殺す、殺されるのどちらかしかない。いつまでも過ちだとか何とかは捨てろ、あと君の持ち前の情も敵には向けるな。油断すると死ぬ」

その言葉にアルスはしばらく考え込んだ。しかし逃れられない現実をようやく受け止め、ゆっくりと、そして力強くうなづいた。

「ようやく受け止めてくれたな、もう言いたいことは全部だ：　じやあ：　また明日」

「また明日：」

2人はお互いの部屋に入り、ドアをしめ、明日に向け眠りについた。

＊

次の日起きると、窓の外に広がっていたのは青い空ではなく、やはり真っ黒な雲で埋め尽くされた曇り空。しかし雨は降っていない。時間は8時30分、少し早い、アルスは髪型、服装、そして武器を整え、部屋を出た。部屋を出た時、ちょうど雪音と出会った。

「今日は早いな　いつもは遅刻してくるのだが：」

「今日ばかりはな、絶対に遅刻しちゃいけないと思ったんだ。自分が死ぬかもしれないからな。あ！　そうだ」

アルスは突然何かを思い出し、ポケットを探り、粉が入った袋と5色の液体がそれぞれ入った瓶を取り出し、雪音の目の前にやった

「これ 俺名前考えたんだ 名前ないと呼ぶの面倒で…」 面倒まで口にしたときに雪音の声がかぶった

「言ってなかったがこれ名前あるぞ 名前はリバイス、改めると言う意味だ」

「ああ：そうか：俺頑張って考えたんだけどな」 朝からいきなりテンションが下がったアルスに、「その頑張りだけは認めてやる」といわんばかりに、雪音がすこし笑った。

「じゃあ行こうか 死ぬなよ」 アルスが雪音に手を突き出し、握手をするような手のひらき方をした。

「余計な御世話だ」 雪音はその手を払いのけ、エレベーターに乗り込んだ。アルスもそのあとをついて行くようにエレベーターに乗り、二人は1階に下り、外に出た。

外に出ると、出勤途中の人々や通学途中の子供たちがせわしなく行き来している。普通の人々にとっては普通のいつもと変わらない日常。しかし、アルス達にとっては戦いの日、運命の日。

2人はせわしなく行き来する人々をかき分けるように、支部へと向かった。

支部はなんの変哲もない普通のビルであるが、雪音はまちがいないここが支部だ、と確信していた。そして支部の隣には電話の通り、廃ビルが静かにたたずんでいる。人の出入りは無い

「じゃあ覚悟を決めろ、いざとなったら私の携帯に電話をかけろ、番号も教える」 雪音はそう言って、星とハートのキーホルダーがついた携帯電話と紙とペンを取り出し、紙に番号を書いた。

「俺：電話持ってないんだけど」 アルスは恥ずかしそうに頭を掻いた、雪音は「はあ？」とあきれ口調で言った

「携帯の一つや二つ、持っているのが常識だろ！ 今の時代！ まったく： まあ：しかしだな：番号ぐらいは知っていても良いだろ」 雪音は紙をアルスに手渡し、照れるようにそっぽを向いた。

「：何に照れてるの？」 アルスが雪音に問いかけると雪音は顔を赤くした。

「べ：べつに照れてなんかいない！　ただ：あれだ：暑いんだよ！　気にするな！　もういいだろ！　いくぞ！」　雪音は顔を真っ赤にしたまま、廃ビルの中へと向かって行った。アルスもやれやれと思いつながらそのあとをついて行った

廃ビルの中に入ると、人は誰もいなかった、あるのは少しばかりの机と紙クズや埃だけ、その廃ビルの奥に、いかにもまだ新しい鋼鉄の扉があった。2人は扉を開け、扉の向こうにあった部屋の地面にある隙間を見つけた。

「これが支部に続く地下通路の入り口か：なんか緊張するな」　アルスが胸に手を当て、深呼吸をしている間に雪音は地下通路に通じる扉を開け、飛び降りて行った。

アルスが飛び降りると、そこに広がっていたのは、金属でできた床と壁、壁にはたくさんのパイプくっついていて、それぞれが奥に向かって伸びていた

「いかにも秘密基地って感じだな　テンションが上がってきた」　一人ウキウキしているアルスを雪音は無視し、銃を構えて奥までもすごいスピードで走りぬけて行った。

「じゃあ俺は剣でかっこよく行きますか！」　アルスはリバイスを剣に変え、雪音と同じように奥まで駆け抜けていった。

かなり走ったところで通路の角で止まっている雪音を見つけ、アルスは立ち止まった。雪音は銃をかまえ、角から何かの様子をうかがっている。アルスも雪音と同じように角から様子をうかがうと、目の前に広がっていたのは広い倉庫、その中心には飛行船があり、その飛行船を武装した兵士たちが守るような配置で立っていた。

「あれが本部に行く飛行船だな：よし！　乗っ取りに行くぞ！」

アルスが剣を構え、飛び出そうとするのを雪音は手を出して止めた「君：アヴニールの忠告を聞いていなかったのか？　戦ったら死ぬと言われたんだぞ：私に作戦がある。　アルスこれを投げてくれ」

雪音はそう言って、ポケットから玉のようなものを出した

「これには零の部品から作った小さなロボットから作ってあるが、

その形は人間に酷似している、これを奴らのところに投げてくれ、奴らが混乱している間に持ち前のスピードで乗り込むぞ」

アルスは言われたとおりに、雪音に手渡された球を手に取り、思いつきり投げた。球は音を立ててはじけ、中からヒト型のロボットが出てきた。兵士たちは雪音の思惑通りに動き、その間に2人は作戦通りに飛行船に乗り込んだ。

そんな二人を飛行船の中から血のような真っ赤なドレスが不気味な笑みで見つめていた。

第12録 罨

飛行船の中には荷物がたくさん置いてあるだけで零の姿は見当たらなかった。アルスと雪音は近くにあった木箱に隠れ、本部につくまで隠れることにした

その飛行船の操縦室では、赤いドレスの女が零を集めていた。

「いいですか 今この船内には姫坂と例の少年が紛れ込んでいます。ちょうど倉庫からの入り口の木箱の中にいますが、攻撃してはダメです、見つけてもだめです。無傷で本部に連れて行きます。」 女の言葉に零達はうなづき、それぞれの持ち場に散らばった。

その時、女の携帯が鳴った。女は携帯をとった

『やあアビー そちらの作戦はどうですか？ 雪音はあいつの覚醒のため、アルスとか言う子供にはある可能性のために無傷で本部まで連れて来てくださいね』 電話の向こうの声は若い男の声だった、
「作戦をもう一度言わなくても分かっている。 相変わらずおせっかいだな、ソトザキ キスケ（外崎 喜助） こちらは順調だ。これから帰還する、イズベルカのバカを連れて」 アビーの傍らにはひもが置いてある、さっきまで何かを結んでいたような形で置いてあった

『イズベルカはやられちゃったんですか？ まあ、あの人の事だから一人で突っ走ってやられちゃったんでしょうね、しかし雪音にやられるほどの弱さじゃなかったですよ？ 雪音はそこまで強くなってたんですか？』

「おかしいな武器を使っていた。 不思議な金属を粉末型にし、特殊成分が配合されている色がついた液体をかけ、武器を作っていた。

その武器はなかなか強力なんだ。それと雪音にあの人格が目覚め始めていた。完全に覚醒してないとはいえ… その力はあなどれないものだった。」

『そうですか… これは作戦が早く済みそうですね。分かりました

作戦を続けてください 無傷でお願いしますよ』

倉庫では、アルスと雪音が木箱に隠れていた。2人は時々見回りに来る零に肝を冷やしながら隠れ続けていた。

罠とは知らずに：

「案外気づかれないもんだね。このままいけば無傷で本部までいけそうだね」 アルスが雪音に小声で言った。しかし雪音は見つからないように黙っている。

そんな2人に復讐に満ちた女がライフル片手に近づいていた。その気配に気づいたのはアルスだった。

「木箱から出ろ！ 姫坂！ 見つかつてる！」 その言葉に雪音も驚き、木箱から飛び出た。

木箱から出た瞬間、銃声が響き、木箱は吹き飛んだ。木箱の後ろでライフルを構えていたのはイズベルカだった

「イズベルカ！ てめえまだいたのか」 アルスがさっき作った剣をイズベルカに向けたが、イズベルカはその剣を発砲し、粉々にさせた。アルスも衝撃と爆風で吹き飛ばされ、地面に倒れこんだ。

「アルス！！」 姫坂の大声が倉庫に響いた。イズベルカが姫坂にライフルを向ける

その時、銃声が響き銃弾がイズベルカの頭を貫いた。イズベルカは真っ赤な花を咲かせ、地面に倒れた

「馬鹿が… 傷がついたらどうしてくれるんだ」 アビーが煙が出ている拳銃を持って倉庫に入ってきた。

「傷がついたら？ 一体どういうことだアビー！」 雪音が床に転がったライフルを拾い上げアビーに構えながら言った。

「残念ですが。その質問には答えられません しかしこれだけは言っておきます、雪音、あなた達を無傷で本部へ連れて行きます。

抵抗せずに操縦室に来てください」

「何か考えているみたいだな。 なら逃げるぞ」

「無理です。 もうこの飛行船は上空400m付近を飛行しています。飛び降りてもいいですが死にます あなた達に逃げ道はありません

せん、そこで倒れているアルスとか言う悪魔……子供を連れて私たちについてきてください」

*

結局何も聞き出せずに、操縦室についてしまった。アビーは雪音にアルスをそこらへんにおいとくように指示し、大きな椅子に座った。

「やあ雪音： お久しぶりですね、 零を破壊して私たちの邪魔をする相手が雪音：君だなんてまったく予想しませんでした。 と、 どうか生きていたんですね。 てつきりあの時、 僕の攻撃で死んじやったのかと思いましたよ」

しかし外崎はスマイルを浮かべているだけで、表情を一切変えない。「今回、あなたたち2人を本部へ招待します。もちろん無傷で、飛行船内ではあなたたちが抵抗しない限り、あなた達に一切、危害を加えません。安心して快適な空の旅を続けてください。」

「さっき、イズベルカに殺されそうになったが」

「あれは作戦を無視したイズベルカが悪いんですよ」

「さっきから作戦 作戦って言ってるが、作戦ってなんだ！」

「残念ながら答えられないですね」 外崎は顔を傾けて言った

「力づくで聞くしかないのか」 雪音が手に持っていたライフルを構えた時だった。 外崎の表情が一変した

「言ったはずです… 抵抗しなければと…」 雪音が気づいたころにはもう遅かった。 アビーが雪音の後ろに立っていた。 アビーは雪音の後頭部を殴り、気絶させた。

「残念ですけど、無傷で…という指示は守れませんでしたね、 ま、いいでしょうイズベルカが2人を気絶させ、作戦を無視したため殺された というものでいいでしょう。 では、早くここまで連れて来てくださいね」

アビーは何も言わずモニターを消し、窓から外を眺めた。 先にはたくさん高層ビルの中に、基地のようなものがあり、基地のヘリポートにはHではなくこう書いてあった

— S — と

第13録 本部での戦闘

アルスが目を覚ますと、研究室のようなところのベッドの上だった。姫坂はいない。周りには、人間や零がうろろしている。アルスのベッドの周りにも数人いたが、アルスが起きたことには気づいていない。研究員たちは会話を始めた

「ネグロの覚醒はどうなっているんだ、つーかこいつ悪魔だからすぐ起きるって言ってたが、まったく起きないんだが」研究員が振り返り、アルスの顔を見つめている。アルスは心臓をバクバクさせながら寝た振りを続けた。

（こいつら：俺が悪魔だってこと気づいてる： どういうことだ：
アヴニールと関係あるのか： ん？ ネグロ： ネグロ！？

じゃあ姫坂は：）

アルスは自分の腰にリバイスがあるかどうか確認したが、リバイスは見つからなかった。おそらく敵に取られてしまったのだろう。

アルスは薄眼で部屋を見渡し、武器を探した。

ちょうど部屋の奥、銃が3丁ほど置いてある

（こいつらを一瞬で気絶させて、銃を取りに行くか： いや危険か：）アルスは考えた、もしここで成功しても雪音がどこにいるかわからない。成功しない可能性もある。

考えた末、アルスは銃を取りに行くことにした。

研究員が背を向けているとき、アルスは飛び起き、研究員に蹴りを食らわせ、倒れかけた研究員を持ち、他の研究員にぶつけた、残った何人かが銃を発砲してきたが、上手くかわし、部屋の奥まで転がり込み、銃を持った

アルスはためらいながらも銃を1弾ずつ、5人の研究員に当てた。

銃弾を受け、倒れた研究員のポケットから、アルスは合計で5丁銃を取り出し、部屋を出た。道は右と左に分かれていて、アルス

は右に進むことにした。

部屋を出ると、うろついていた零が襲いかかってきた。アルスは胸に当てないように発砲し、雪音を探しに行った。

50mほど進んだ先に、案内板を発見した。大きな部屋が向かう先に4つ、研究室が5つ、反対方向にも同じ数があり、2階や3階もある、アルスはとりあえず、一番近くの研究室にむかった。たびたび零の襲撃を受けながらも、アルスは研究室までたどり着いたが、姫坂はおらず、ハズレだった。

それ以外の近くの研究室もすべて回ったが、姫坂はいない。あとはこちら側の大部屋と反対側の研究室と大部屋と2、3階。あまりにも広いので見当がつかない。

（雪音はどこにいるんだ： 研究室には居ないのか： それにしても広すぎて探すのに時間がかかりすぎる：あまり時間をかけると雪音が：）アルスが襲ってくる零を倒しては進んでいるうちに一番奥にある大部屋についていた。

アルスが入ってみると、蒸し暑い湿気の帯びた部屋が広がっていた。真ん中には机がある。机の引き出しを開けてみると、アルスのか姫坂のかは分からないが、リバイスが置いてあった。

「よし！ やったぞ！ これさえあれば：」アルスがリバイスを手に取った時、男の声が聞こえた

「かつてにさわらないでくれるかな：アルス君：そこは僕の机なんだけど：」後ろに立っていたのは、どこかの制服のブレザーを着た、外崎喜助が立っていた。

「誰だあんた：」

「紹介が遅れたね、僕は外崎喜助。この会社Sの本部2番隊隊長を務めています。誕生日は3月9日 身長は171cm、体重は69kg 好きな：」

「そこまで言わなくていい！ 名前だけでいいんだよ！ で、姫坂はどこだ： 知ってるんだろ！」

「知ってどうするのですか？ 会えませんよ、君はここで僕に敗

れ、魔石を取られるんですから」

「なんで魔石の事を知ってるかはわかんねーけど、あいにく持ち合わせてない！ 無くした！」 無くした？ おかしいですねと外崎は首をかしげた。

『魔族は魔石を無くすと死ぬはずなのですが… まあいいでしょう、隠しているようなので力づくで頂きます』

外崎はそう言って、袋とビンを出した。そして袋から粉を出し、液体をかけた。

「なんで…なんでもってんだ！ それはリバイスじゃねーか！」

「君の持ってたのから頂きました、ではちよっと眠ってもらいますね」 リバイスは大きな剣に変わった。

「しゃべりかたや見かけによらず、コエーもん使うじゃねーか」

アルスの言葉に外崎は少し笑う

「君が武器を持つまで待ちますよ、武器を持っていない相手をいたぶるのはあまり好きではないですからね。」 外崎は剣の先を地面に付け、剣にもたれながら言った

「優しいんだな」 アルスはリバイスを剣に変え、構えながら言った

「まさか、何も持っていない敵を倒すのは楽しくないでしょう。

では少し眠ってもらいますよ」 外崎は剣を地面から離し、剣先をアルスに向けた。

「同感だ」 アルスは言葉を発したともに、剣を構えながら外崎まで、走り、切りつけた

外崎は剣をひらりとかわし、アルスに向かって剣を振りおろす。

アルスは剣を剣で受け止め、左に流すが、外崎は剣を離し、よろけたアルスの腹部に蹴りを食らわせた。アルスはふっとんだが、空中で体制を整え、地面に片手と右の膝をついた

外崎は地面に落ちた剣を拾い、地面にひざをついているアルスに向かって空中で剣を振った。

剣を振ったところから、透明のかまいたちのようなものが3つ出来た。 かまいたちのようなものをアルスは剣で1つ受け止めたが、

もうひとつはアルスの肩を切り裂いた。もう一つは外れて、壁に当たった。

肩をおさえ、もがくアルスにも外崎は容赦せず、かまいたちを作り攻撃してくる。アルスもよけるが、何発かは当たってしまう。

アルスは圧倒的に不利な状況に立っていた

「な〜んだ、悪魔だって言うから強いかと思ったんですけど、期待はずれですね… こんなの3番隊の隊長のほう強いくらいですね…」

外崎はやれやれといったしぐさ、表情で言った

（なんでだ… なんであいつは剣を振り回すだけでかまいたちみてーなものが作れるんだ…） アルスが切られた肩を触ると、切られた所は血ではなく、水のようなもので濡れている。アルスは何かに気がついた

（確かこの部屋… 蒸し暑かった… もしかしたら… あのかまいたち…）

アルスは剣を思いっきり外崎に向かって投げた。しかし外崎はいつも簡単にかわした

「ヤケになっても勝てませんよ あきらめるなら今のうちですよ…」

外崎はアルスが投げた剣を拾い上げた

アルスは外崎にばれないようにリバイスでSのパーティの時に使ったグローブを作り、モードをトゥルエノ（雷）に変えた

「悪魔は5万ボルトまで耐えられるけど人間はどうかかな！」 アルス

はグローブを地面に当てた。外崎は驚き、かまいたちを起こし、アルスに攻撃しようとしたが、電気が濡れた地面を伝わる方が早かった

「ぐわああああああああっ」 外崎は悲鳴を上げ、電撃を浴びる。

アルスも必死に耐えた。

外崎の上の服は焼け焦げた、外崎は地面に倒れこんだ。

アルスは息を切らしながら、ガッツポーズをした。そして外に出ようとした時だった。

背中に剣が突き刺さった。アルスが震えながらも後ろを振り向くと、笑顔の外崎がたっていた

「残念でしたね」　考えまではよかったです、僕たちSの兵士は電撃にも耐えられるような、服を着ているのですよ。　ぜくんぶ電気は服に吸収されちゃいました」　上半身裸の外崎はにっこり笑っている。

「畜生！」　アルスは歯を食いしばりながら倒れた。

第14録 窮地

姫坂は、気がつくと、自分の目の前の風景は曲がっており、気泡が目の前を通っていった。　どうやら液体の中に入れられているらしい。　しかし、苦しくはない。　酸素マスクのようなものが口に付いているからだ。

目に水が入らないように薄眼で周りを見渡すと、自分が入っている装置の周辺には7人の研究員と10体の人間型零がいる。　戦っても倒せるような数じゃない。　怪我もしている。　状況を理解し、どうやってこの場を乗り越えようか考えているときに、研究室の扉があき、誰かが入ってきた。　姿は分からないが声ですぐに何者か判別できた。

「調子はどうだ雪音、　わが軍の最高回復装置だ。　お前ならあと5分ほどで回復できるだろう。　まさか生きてるとは思っていないかった。　あの時死んだと思ったんだが…」

しかし液体の中に入っている雪音は話せない。　ひたすら男を見つめていた。

「おおっと…　話せないのか。　待ってろ、今すぐ話せるようにしてやる。」　男はそう言うと、雪音の入っている機械のパネルを触り、雪音の顔までの水をぬいた。

「酸素マスクしてても話せる。　外してもいいが苦しいぞ。」

雪音は酸素マスクをしたまま、喋った。

「シュコー上谷おかみたにシュコー、　前はシュコー、だったが昇格シュコー　階級はシュコー、　シュコーシュコー」　酸素マスクから漏れる音が雪音の声をかき消す。

「やっぱり酸素マスクはずせ、　シュコシュコうるせえ、何言ってるか全然わかんねーんだけど」　上谷という男がツツコむ。　雪音も渋りながら酸素マスクを外した。

「上谷お前、前は1番隊隊長だったが…　そのワッペン…昇格した

んだな、階級はなんだ…」

「副社長だ、1番隊隊長はまだいない。いや今から出来る。雪音お前が1番隊隊長だ。いや…お前は雪音じゃなく、ネグロになるがな」

雪音は目を開き、驚いた。そして歯を食いしばり、怒りをあらわにした。

「ふざけるな！ 誰がもういちどお前らなんかの仲間になるか！」

「そのセリフ…ネグロも言うか？ ネグロになっちまったらお前の意志は完全無視なんだろ？」

「だれがネグロなんかになるか！ これは私の体だ！ 心を許したやつ以外、人格を乗っ取られてたまるか！」

「まあ、じきそんなことも言えなくなる。今お前が使っているそのケースの液体… 回復のためもあるがネグロの覚醒のためでもあるんだぞ」

姫坂は、また驚いた。そして拳であわててケースをたたき、必死に出ようとした。しかし、割れない。力もうまく入らない。

「止めておけ、拳…痛めることになるぞ… おとなしくネグロになっちまいな 苦しくないぞ」 その言葉によけい姫坂はもつと抵抗する。しかし、カバーは多少揺れるぐらいでヒビひとつ入らない。

「ま、好きにしな。自分の体だから…」 上谷の声とかぶるように爆音が聞こえた。

「ああ？ 何の音だ…？」 上谷がモニターの電源を付けると、通路を走るアルスの姿がうつされた。

「なんだ…てめえの連れじゃねーか。もう起きちゃったのか。」

あいつが進む方向には…外崎がいるな」 上谷は近くのマイクを取り、放送を外崎がいる部屋に合わせた

「オイ！ 外崎！ 今からそっちにアルスが行く！ 殺さねえ程度に痛めつけろ。出血もさせろ！ 賢者の石も忘れずに獲れよ。」

上谷が話しかけると、外崎は「了解」 と言って。不気味な笑顔

を浮かべる。

姫坂は叫ぶ。

「おい！ アルス！ そっちに行くな！ おまえじゃ外崎には勝てない！」

「残念だったな… 通信切れちゃったぜ あきらめてネグロに…」

「ならない！ ネグロにも、お前らの仲間にも！ 絶対にならない

！」 雪音が叫ぶと、上谷は「ハイハイそこまでー」と言って、パネルに触った。ケースの中を液体が埋め尽くした。 姫坂も急いで酸素マスクを付ける

（うう…ちくしょう… どうかできなにか… このままではアルスが外崎に… 私がネグロに…） 姫坂がいい作戦を考えるが何思いつかない。

「じゃあな雪音…、あと10分もすればネグロになる。そして外崎が捕まえたアルスの持っている力を使えば、

全ては還元されてゼロになる！ そしてSの世界がゼロから始まる！ 世界の始まりだ！」 上谷は笑いながら、研究室を後にした。

姫坂はあきらめかけ、悔しさで歯を食いしばり、涙を流すが、水と混ざり消えた。

その時だった

いきなり研究室にいた人間が倒れ、零も止まった。そしてケースが開き、液体と共に姫坂は外に出た。

「何が起きた!？」 パネルには「エラー」と出ている。 何が起こったかさっぱり分からない。

「そうだ！ アルスを助けに行かなきゃ！」 姫坂は零からいくつかの部品と、武器、研究員からは拳銃を取り出し、研究所を後にした。

第15録 社長アキラハイル

姫坂が向かう先ではアルスがもう外崎に敗北していた。

「さて：これでいいんですよね。急所は外したし、死んでないですよね」 外崎がアルスの体を持ち上げ、抱え、歩き出そうとした時だった。

発砲音がして、外崎の右手から血が飛び出た。しかし外崎は顔色一つ変えず、銃弾が飛んできた方向に視線を向けた。

その先には、びしょぬれになった服を着ている雪音と金髪の15、6歳の男の子がたっていた。

「あれ？雪音： なんでキミがここにいますか？ 君はネグロの覚醒のため研究室にいたはず…。」

「何故かは知らないが機械が壊れ、出れたので逃げてきた。」

外崎はそうですかといわんばかりのしぐさを見せた。そして雪音の隣にいる人物に視線を変えた。

「君：たしか4番隊の新入りでしたよね？ 何してるのですか？

まさかの裏切りですか？」

「そうだ！ 全部雪音さんとアルスさんを助けるために練った作戦。お前らの仲間になっていたのはただの芝居

だ！」

男の子が強気で叫ぶと、外崎はため息をついた。そしてアルスの背中に刺さっている剣を抜き、血の滴る剣を男の子に向けた

「Sの規約：その19、当社内での無意味な仲間殺し、および裏切り者には死。この規約により、新入社員のノアIIボウルの死刑を執行します」

外崎は顔に表情を浮かべずアルスを苦しめたかまいたちを4つ作つた。しかしそれはノアの手のひらに当たると、かき消されるように消えた。地面に水が垂れた。

外崎は少し驚き、もう一度かまいたちを作るが、全部かき消される。

「どうしてだ！　なんで攻撃が消されるんだ！」　外崎は口調を変えるほど酷くとり乱した。

「お前のその攻撃…　あの壁にある傷とこの部屋の湿度から考えると、空気中に分散している水分をその剣で一瞬で冷却し、刃として攻撃しているんだろ。」

姫坂はいつの間にか、外崎の足元にいたアルスを抱え、外崎の後ろに立っていた。

「だからノアの手には、高温の熱を帯びたある道具を仕込ませている。手のひらに当たるとお前の氷の刃は溶けてなくなる」

外崎は剣を雪音にも振るう。しかし雪音はアルスを抱えたままひらりとかわし、アルスの上半身を持ち、外崎に振った。

アルスの体は外崎に当たり、外崎は体制を崩す。ノアはそれを逃さず、外崎の顔を殴った。外崎はふわりと空中を舞い、尻もちをついた。剣が1本地面に転がる。

「急に状況が悪くなったりすると酷くとり乱す…。　外崎：お前の唯一の弱点だったな。」　雪音がアルスを抱えなおし、地面に落ちている剣を拾い、外崎に剣先を向けた。剣先から血が滴る。

「…。」　外崎は急に黙った。不審に思ったノアが雪音に近寄る。
「……………」　怒らせたな……………僕……………いや・

・俺を……………　外崎が小声で言った。ノアは嫌な予感を察知し、姫坂を突き飛ばし、外崎から遠ざけた。

斬撃がノアの右手を通り、地面を走り「ザンッ」という太刀音がし、「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」という音と共に、壁が崩れた。　ノアの右肩から下が地面に落ちた。

「ノア！！」　雪音が叫ぶ。しかしノアは痛がるそぶりを見せない。

「大丈夫です！　右手：義手です！」　ノアが地面に落ちた義手を拾い上げる。

しかし、ノアの顔に蹴りがヒットし、ノアは壁にたたきつけられた。

「俺を怒らせたら・・・どうなるかわかってるだろうなああああ
！ 雪音エエエエ！」 外崎の獣のような怒りの叫びが通路に響
き渡った。

姫坂がここまで怒りをあらわにした外崎を見るのは2回目だった。
1回目は5年前、姫坂が外崎と同じ部隊に配属していた時である。

ある作戦で街を襲った時に、外崎は相手の攻撃で顔に傷がついた。
そのことで外崎は怒り狂い、街の住民120人を皆殺しにした後、
街自体を零の爆弾で消し、その街を地図から消し去った。 という
過去がある。

その過去を思い出し、姫坂は恐怖におびえ、立ちすくんだ。
立ちすくみ動けなくなっている姫坂を外崎の右足から放たれるけり
が襲う。

姫坂はとっさの判断で左腕で蹴りをガードしたが、ガードした左腕
に激痛が走った。 少しよろめいた雪音を外崎は蹴り飛ばした。

その攻撃もガードした雪音だが、その衝撃で体は軽石のように舞っ
た。 そのせいで雪音はアルスを離してしまった。 アルスの体は
力なく、床にたたきつけられる。

そのアルスを踏み越え、外崎は大きく飛びあがり、雪音の顔めがけ
て殴りかかる。 その拳を雪音は痛む手で受け止めた。

この拳を蹴り飛ばしてがら空きになった外崎の腹部を殴り、戦闘不
能にする。 姫坂はそう考えた

だが、その攻撃を先にしたのは外崎だった。

外崎は姫坂が想像していた攻撃をそっくりそのまま行った。 まさ
か外崎がすると思わなかったので姫坂は外崎の攻撃をモロに喰ら
ってしまった。 腹部に鈍い音と激痛が走る。

腹を抑え、苦しむ雪音にとどめをさすように、外崎は剣を振り上げ
た。 逃げようとする雪音だが、激痛のせいで動けない。

その時、壁にたたきつけられ、戦闘不能になっていたノアが近くに
あった鉄くずを外崎に投げつけた。 しかし鉄くずはいとも簡単に
外崎の手で受け止められた。 外崎は不気味な笑顔を浮かべる。

「まあ待てよノアア： こいつ殺したら次はお前だからな： 順番だよ：」 そう言って外崎は剣を振りおろした。 肉が避け。 床に血痕が飛び散った。

手でせめてものガードをした姫坂に切り傷は入っていない。 もちろん飛び散った血も姫坂のものではない。

さっきまで外崎の手に握られ、雪音を切り裂こうとした剣は地面に転がっていた。 そしてその剣を持っていた外崎の腹から真っ赤な剣が飛び出ていた。

「な：なぜ：」 外崎が力を振り絞り、後ろを振り返ると、そこに立っていたのはアビーだった。

「Sの規約第3条：『作戦の妨げ、および障害となるものは抹消する』 この規約に従い、外崎：あなたには消えてもらおう。 もし死にたく泣ければ、その体で膝をつき、謝罪せよ。」 アビーはそう言い、剣を外崎から抜いた。 床に血痕が飛び散る。

外崎は最期の力を振りしぼり、謝罪した。 アビーはその姿を見て片手をあげる。 3体ほどの零が出てきて、外崎をタンカに乗せ、研究室へと消えていった。

「アビーはその姿を見ると、死にそうな雪音とアルス、ノアに液体を飲ませた。 傷口や痛むところが消えていく。

「これは雪音：あなたがさっき浸かっていた液体と同じタイプの回復薬です。 それでは作戦の最終段階に入ります。」 アビーが指をはじくとたくさんの部屋から零がかなり出てきた。 おそらく50はいる。

その零達にアルス達はつかまり、ケースに入れられた。

「あなたたちを社長のもとへ案内します。 そこで作戦の最終段階に入ります」 そう言ってアビーが歩き出すと、アルスをつれた零達もそのあとを歩いて行った。

＊

「・・・・・・！痛い！・・・・・・！！」

段差でガタンと揺れたケースの底で頭を強打し、アルスは目覚めた。そこでアルスは自分の体の異変に気づく。

「あれ？　なんで俺・・・・傷が治ってんだ？」　アルスの胸らへんの服にはべつとりと血痕がついている。　だが傷は無い。　そしてもう一つの異変に気づく。

「その男の子・・・・だれ？」　アルスは姫坂の隣で義手をはめているノアを指差した。

姫坂の口から発せられたノアの正体を聞き、アルスは驚きが隠せなかった。

しかし、ノアがなぜここにいると言うことを不審に思った。　ふつうは不可能のはずだが。

アルスがそんなことをぶつぶつ考えている横で反撃の準備を姫坂がしていた。

姫坂はリバイスで銃3丁（5発と空砲1発）、クナイ10本、短剣15本、爆弾13個を作り上げ、自分の腰に装着した。　剣も持っている。

アビーが足をとめた先は、大きな扉の前。　鍵は無く、木製の扉。　3回ノックし、中に入ると、そこに広がっていた部屋は不思議な部屋だった。

部屋の壁に何百というモニターが取り付けられている。　床はガラス張りになっていて、下では魚が泳いでいる。

そして部屋の奥には、タッチパネルが周りに浮いている椅子。　誰かが腰かけている。

「お連れしました。　社長。」　アビーはそう言って、3人をケースから出した。

「む・・・・ごくろう・・・」　椅子に座っている社長と呼ばれる者は立ち上がり、歩いてくる。　しだいに影で隠れていたその顔が見えてきた。

社長は男だった。老人のような顔をしているが、その体にはどこか

若々しさを感じる。不思議というか不気味な感覚だった。

社長と呼ばれる男をアルスはどこかで見たことがあった。しかし、思い出せない。

男はおもむろにアルスに顔を近づけて、自分のあごにあるひげをさすりながら少し笑った。

「うむ：間違いないこいつは魔族だな。」 男はひげをさすったまま、姫坂とノアを流し眼で見て、また椅子まで戻っていった。

「自己紹介がまだだったな、小さき反逆者たちよ。私の名前を言いたいとこだが・・・」 男はおもむろに自己紹介を始めた。

「私には本当の名前が無い」

「嘘な名前なら多くある。 そうだな・・・。 一番多く呼ばれておるのは・・・」

「アクラハイルⅡアモンか・・・。 まあ好きに呼びたまえ」

アクラハイルは浮いているタッチパネルを触り、何かを自分の後ろに出現させた。

アルスは攻撃がくると思い、構えた。

だが姫坂が先に攻撃を仕掛けた。

姫坂は銃をアクラハイルに合計12発撃った。そしてクナイを投げた後、剣を抜き、アクラハイルに襲いかかった。

しかし攻撃は全てはずれ、姫坂の振りおろした剣も簡単に片手で受け止められてしまった。しかし姫坂も負けてはいない。 剣を握り、無防備のアクラハイルに拳銃を向け、発砲した。

今度は効いた。

アクラハイルは「ぐうっ」という声を出し、ひるむ。そこに姫坂の手に握られた剣が振りおろされた。

アルスが「やった！」と思ったその時、上から降ってきた何かを察知し、姫坂はすばやくその場を離れた。

上から降ってきた。 いや降りてきたのはアビーだった。 その手には大きなハンマーが握られている。

「ごふ・・・ むう・・・ 容赦ないな・・・。 その復讐に満ち溢

れた心……。まさにネグロにふさわしい……。」「アクラハイルは口から垂れる血を親指で拭きとりながらいった。

「当然だ！ 私はお前らに復讐するためと、両親を探すために旅をしている！ 目標が目の前にあるんだ！ 全力で叩き潰す！」 姫坂の離れたその言葉に、アクラハイルは首をかしげた。そして信じられない真実を口にした。

「ふむ……。私たちに復讐するのはいいが……。両親を探す……。というのはおかしいぞ。」

その言葉に姫坂も反応する。

「なぜだ！ 子が親を探して何が悪い！」

「親ならもういないぞ……。」「お前の両親は……。死んだからな。まあ殺されたんだが。」

姫坂は耳を疑った。

「死んだ……。そんな……。しかも殺されたって……。誰に……。」「いったい誰にだ！！」

アクラハイルは続けた。

「お前だよ……。姫坂雪音」

姫坂の動きが止まった。 姫坂だけでなく、その場の空気が止まったように感じられた。

「お前が小さい頃。ネグロの覚醒から逃げ出し、研究所を爆破しただろ……。」「あれにお前の親もいたのだ」

「おまえの親はSの社員だったのだよ。そして社員としてその場にいた。そして巻き込まれ、死んだ」

その事実を聞いたとき、姫坂の心が白い闇に飲まれた。

（私が……。殺した？ 父さんと母さんを……。 私が……。殺した……。 私が……。）

—ワタシガコロシター—

「うああああああああああああああああああっ！」 姫坂がいきなり獣のように叫んだ。そして頭を抑えながらもがく。そして糸の切れた人形のようにその場に倒れた。

アルスは見たことがあった。　　姫坂のその倒れ方を。　そして恐怖が湧き上がってきた。

姫坂の髪は先からゆっくりと白色になっていく。　そして完全に髪が白くなると同時に、　笑い出した。

「ふ．．．ふふふふ．．．。　あははははははははは！！　あーっはっはっはー！」　ゆっくり笑いながら顔をあげた姫坂の目の色は紫。　不気味な紫だった。

「ようやく出てこれた．．．。」　　姫坂の発したその言葉に、アルスは絶望した。

第16録 負の人格 覚醒

「あ、しゃちょーだあー。 やっほーアクラハイルしゃちょー ネグロですよー」 白い髪に紫色の瞳をしたネグロを名乗る姫坂は強弱のない声でアクラハイルに向かっていった。

「おお！ ネグロが覚醒したのか！ すばらしい！ すばらしいぞ！」 そう言ってアクラハイルは手を広げ、ネグロに向かって歩きだした。そしてネグロの前まで歩くと、手を差し出した。

「さあ・・・私たちの仲間となり、この世界をゼロに戻そうではないか！ そして私たちで新しい世界を作ろうではないか！」 アクラハイルは手を差し出したまま、不気味な笑顔でネグロに向かって言った。

「新しい世界・・・いいわねえ・・・」 そう言ってネグロは手を差し出す。

「オイ！ 姫坂！ 駄目だ！ そいつらのいいなりになん・・・」 アルスがネグロを止めようと走りだが、アビーのふるった剣で止められてしまう。

「ちよっと黙っててもらえますか？」 そう言ってアビーは剣先をアルスの顔の前に向けた。

「うるせえ！ 誰が黙るか！」 アルスはそう言って、床に手を付き、アビーの剣を足で素早く蹴り飛ばす。 アルスは素早く手で床を押し、高く飛び上がり、宙を舞う剣をつかみ、アビーに振りおろした。

「おとなしく聞きますせんか。 ならば考えがあります。」 そう言ってアビーが指をはじくと、空中にタッチパネルが浮かび上がった。アビーは浮き出たタッチパネルを何度か触る。

「おそらく普通に戦っても勝てそうにないですね」 そう言ってアビーがタッチパネルを消すと、アビーが立っていた床が開き、アビーは消えた。

「逃げた？　ならいい！　無駄な血が流れな・・・」　途中まで言いかけたアルスの右肩をレーザーが貫いた。

「逃げていません」　アビーの声がさっき開いた穴から聞こえたと同時に穴から何かが飛び上がってきた。

「おいおい・・・反則だろ・・・」　飛び上がったのは大きな鳥型の零、しかもかなり素早い。

「しばらく私が相手をします」　アビーはそう言って、零に搭載している機関銃でアルスを狙う。　アルスは剣ではじきながらネグロの近くまで走りぬける。

「おい姫坂！　いやネグ・・・」　アルスは自分の目の前に広がっている惨劇のせいで、言葉が途中で止まった。

アルスの前で、アクラハイルが雪音の手に握られた剣で貫かれていた。

「な・・・なにが起こったんだ・・・」　アルスが震える声で言うと、ネグロは剣を握る手を離す。　アクラハイルは剣が刺さったまま糸の切れた人形のように床に倒れた。

「社長！」　アビーが叫び、ネグロに向かって銃を乱射してきた。

「馬鹿野郎！　アクラハイルごと消すきか！」　アルスはアクラハイルを抱え、逃げる。　だがネグロはその場から一步も動かない。

「なにしてんだネグローー！　死ぬぞおおお！」　アルスは振り返りながら叫ぶ。　しかしネグロは動かない。

ネグロの唇がかすかに動く、　なにかを喋ったようだが聞こえなかった。

ネグロは人間とは思えないほど飛び上がり、零に乗り、自分にむかって突進してくるアビーに向かって、銃を1発撃った。

放たれた銃弾はアビーを貫いた。　アビーは零から滑り落ち、床にたたきつけられる。　アビーの乗っていた零はそのまま壁に突っ込み爆発した。

床にたたきつけられ、うめきながら体をくねらすアビーにネグロは

ゆっくりと近づいて行く。

そして銃を向けた。

「おいネグロ！　どうする気だ！　止めろ！」　アルスが叫ぶと、ネグロが振り向いた。

「どうするってこうするしかないでしょ」　ネグロは無表情のまま発砲した。　周りに血が飛び散り、アビーは動かなくなった。

「てめえ！　もう分かった！　お前は雪音じゃない！　俺が全力でお前を倒してやる！」　　アルスはそう言って、アクラハイルの腰についている剣を抜きとり、ネグロに向けた。

「へえ・・・アルス・・・キミに私が殺せるとでも思っていたの？　意志は私でも、体は雪音のものなのよ？　私を傷つければ雪音も傷つく・・・。それでも殺せるかしらねえ・・・」　ネグロは相変わらず強弱も感情もなさそうな不気味に喋った。

「姫坂も分かってくれる！」　アルスはそう言うと、剣を構え、ネグロに向かって走り出した。

「私が言いたいのは君のその『情』がどうなのか、なんだけどね・・・」　ネグロは素早くリバイスで剣を作り、向かってくるアルスを迎えようと構えた。

第17録 最後の道

「私が言ってるのは君のその『情』がどうなのかなんだけどねえ・・」
ネグロはそうつぶやくと、剣を構えながら突進してくるアルスに対し、剣を持つ手を力なく下げている。

アルスは声をあげながら剣を振りおろす、ネグロはいとも簡単にかわし、自分のポケットに入っている拳銃をアルスに向け、発砲する。
アルスは銃弾を手で受け止め、地面に投げつけた。

「いっとくが本気になった俺には銃は効かない。銃弾は見えてるからな、とるのもわけ・・・」アルスは話している途中だったが、ネグロは何も言わず、剣を振る。

不意を突かれたアルスは体制を崩しながらも、ネグロの剣を自分の剣で滑らすように受け流す。アルスは体制を崩したネグロにみぞおちをひじ打ちを食らわせる。ネグロは2、3よろめいた。

「な〜んだ・・ちゃんと攻撃できるんだあ。手だからかなあ・・

・？」ネグロは感情のこもってない声でいい、自分の口から垂れる血を親指で拭き取った。

「なに訳わかんないこと言ってんだよ！」アルスは余裕をかましているネグロに若干のいらだちを感じながら、剣を振る。ネグロは自分に振りかかろうとする剣をよけようとしず、銃をとりだす。ネグロは自分頭に振りかかろうとしている剣をじっと見つめ、黙っている。

（なんでよけない！）アルスは心でそう思いながら剣を振りおろした。

「な・・・なんでだ・・・ちくしょう・・・」アルスを食いしばった。

アルスの振りおろした剣はネグロの頭よりも10cmほど上で止まった。ネグロは何もせず、ただ不気味な笑いを浮かべている。

「ねえ知ってる？ 殺し合いの中で『情』におぼれた馬鹿は敵に殺

されちゃうんだよね・・・」　ネグロはそう言って拳銃をアルスの頭に向けた。

「ばーい、ばーい」　ネグロが感情のこもっていない機械のような声で呟く。

そして、銃声が響いた。

「・・・っ！」　アルスはただ何もできず、目をつぶっていた。

しかし、いつまでたっても自分に銃弾が飛んでこないため、ゆっくりと目を開けた。

そこには銃を落とし、腕を力なくぶら下げているネグロ。そしてその後ろにさっきまでまったく存在感のなかったノアが銃を構え立っていた。

「いったーい　ひどーい、いきなり撃つなんてえ」　ネグロは自分の手から流れる血をなめながら振り向き、ノアを冷たい瞳で見つめた。

「それ以上アルスさんは傷つけさせない！　ここからは僕が相手をする！」　ノアは銃を構え、ノアをにらむ。

「やめろ！　お前じゃネグロには勝てない！」　アルスは叫ぶように言った。

「アルスさんも勝てないです！　アルスさんはネグロに雪音さんの姿が重なって倒すことができないんです！　違いますか！？」

ノアも負けじと銃をかまえながら叫ぶように言った。

「そういうことお・・・。　アルスう、あんたのそのくだらない『情』は私にとって何よりの盾。　アルス。　あんたは私を絶対に殺せない。　私は出来るけどね。」　そう言ってネグロはアルスを発砲した。

銃弾はアルスの足を貫いた。　アルスは体制を崩し、床に膝を付く。　ノアはとっさに発砲するが、銃弾は全てネグロをそれ、壁や床に当たる。

「ちゃんと狙って撃たないと。　こうやってねえ」　ネグロはすさまじい速さで引金を抜く。　放たれた銃弾はノアの右胸を貫いた。

「ノアアアアアアアッ！」　アルスは足を抑えながら顔をあげ、叫んだ。　ノアはゆっくりと倒れた。

「ちくしょおおおおお！」　アルスは足に力をこめて立ち上がり、ネグロに拳を振りかざすが、簡単に受け止められ、顔の前に銃を突きつけれる。

「今度こそ終わりだね。　アルス、アンタが主人公の人生という物語はここでBAD　END。　DEAD　END。　GAME　OVER。」　ネグロはゆっくりと引き金に力を入れる。

「まいったな・・・セーブしてねえや。　復活の呪文も覚えてないや。」　アルスはこの窮地をどう切り抜けようか必死に考えながら言った。　そしてあることに気がついた。

「ばいばいアルス」　ネグロは引き金を引いた。
しかし弾は出ず、空砲だけが響いた。

「銃っていうのは基本5発実弾、1発威嚇のための空砲なんだよ！　お前がその拳銃で撃った弾は5発！　もう弾は無い！」　アルス
はにやりと笑い、銃で撃たれた足でネグロを蹴り飛ばした。

「いってー！」　アルスは足に走る激痛をこらえながら、後ろによろめくネグロの腹に正拳突きを食らわせた。　ネグロも少し焦ったのか、リバイスをポケットから急いで取り出す。

「はい没収ー」　アルスは無理やり、リバイスをもぎとった。　ネグロは舌打ちをし、必死に取り返そうとアルスに殴りかかる。

（とりあえず、これで武器は作れないはずだ・・・　ここからどうするか・・・）　アルスは足の激痛をこらえながらネグロの放つ拳を受け止めたり、かわしたりしていた。

その時だった。

基地が大きく揺れ、アルスはよろけ、倒れる。　ネグロは少しよるめいたが、倒れることはせず、ただ自分の周りに起こっている異変を感じ取ろうと、キョロキョロしている。

「な・・・なんだこの揺れ！　どうなってんだ！」　アルスは足をさすりながら、大声で言う。　そしてふと、部屋を見渡した。

「アクラハイルは……。アクラハイルどこ行っただ！？」

本来ならば、ネグロの剣に貫かれ、倒れているはずのアクラハイルの姿が無かった。

その時、ノアが声を絞り出すように言った。

「まさか……。アクラハイルは……。あ……。ぐ……。アルスさんの流し……。流した血で……。賢者の魔石を……。つく……。作り上げたのか　う……。」

「お……。俺の血でなんだって？」　アルスはノアに近づき、話しかけた。

「アクラハイルは……。ぶふ……。アルスさんのような魔族の血から賢者の魔石を作り上げる実験に成功したと……。ふぐ言ってたんです。　おそらくその魔石の力を使っただんです」

「その魔石でどうする気なんだ！　アクラハイルは！」

「すさまじい電磁波とエネルギーを積んだSの最終兵器、ラウンド零でこの

ノアはそこまで言うのと、目を閉じ、動かなくなった。

「まじかよ……。本格的にやべえじゃねーか」　アルスはノアの心臓に手を当て、ノアがまだ生きてることを確認すると、ノアを背負い、部屋の奥に出来た通路に向かって走り出した。

しかし、その足取りは一発の銃弾に遮られた。

「どこいくのお！　まだ決着ついてないよお！」　横には銃を構えたネグロが立っていた。

「クソッ！　どいつもこいつも！　つーかあいつ銃何丁持ってるんだ？」　アルスはノアを背負いながら、ネグロをにらんだ。

アルスはふと自分の手元を見ると、さきほどネグロから奪い取ったリバイスが無かった。　おそらく転んだ時に、落としたのだろう。

そしてそのリバイスをネグロが持っていた。

「さすがに少しヤバイみたいね。　さっさとあんたを殺ってあたしも逃げなきゃね。」　ネグロはリバイスでロケットランチャーを作

り、アルスに向けた。

「ロケランはねーんじゃねーの？」　アルスは冷や汗を流しながらポケットから銃を抜いた。

（殺らなきゃ殺られるがあれば姫坂だ……。　どうするか……。　どうするか……。）

ネグロが引き金を抜いた。　ロケットはアルスに向かって一直線に向かってくる。　アルスはロケットに銃弾を撃ち込み、爆発させ、爆風にまぎれながらネグロまで近づいた。

「見えてるよっ」　ネグロが煙をかき消すようにアルスの前に飛び出てきた。　アルスはネグロのふるう剣をほほにかすめながら何とかかわし、5歩大きく後ろに下がった。

「その背中のデカイお荷物のせいでだいぶ動きづらいみたいね。

捨てちゃったら？　そんなもの。　守ったって何の意味もないわよお」　ネグロは剣を空中で振る。　剣先についた血が周りに飛んだ。

「意味ならある！　こいつは会って間もないが大事な仲間だ！　絶対守る！」

「仲間……。　くっだらない。　人間生きようと思えば一人でも生きれるのよ？　しかもそのお仲間……。　もう死ぬわよ。」

「人間は絶対一人じゃ生きられない！　お前の今着てる服、それも他の人間が作ったもんだ！　お前の使ってる剣だって銃だって、一番最初に作ったのはお前じゃないだろ！　お前が育ったのも家族がいたおかげだ！　お前の両親がお前を生んでくれたからお前がいる！　人間誰でも絶対一人じゃ生きられない！　あと、こいつは死なせない！」　アルスは怒るように言った。　そしてゆっくりと表情を緩め、優しい笑顔でネグロに語りかけた。

「なあ姫坂……。　ネグロの中にまだお前がいるんだったら聞いてくれ……。　お前はもう一人じゃないんだ。　俺だって、ノアだって皆お前の仲間だ……。　頼むから目覚めてくれよ……。　また話そうよ。　旅をしようよ。　お願いだ……。」

「フン！　残念けどもう私の中に雪音の人格はないよお。　もう

完全に私になったの。 そんな糞みたいな言葉届くはずも無いの」

ネグロは不気味な笑顔を浮かべながら自分の胸をたたいた。

「いや・・・届いてるさ。 きつとな」 アルスはキツと表情を変え、ネグロをにらんだ。

「もし目覚めねーっつーんだったら目覚めさせる！ 俺がこの手で絶対に姫坂を起こしてやる！」 アルスはそう言うと、近くに落ちている剣を拾い、ネグロにむけた。

「『情』で私を切れない癖にえらそうなことをいうじゃーん。 そのあんたが今持つてる剣で私を切れるの？ 殺せるの？」 ネグロはリバイスで銃と剣、短剣を作り、全てを体にしまった。

「さあどうかな！？」 アルスは走り出し、一気にネグロに詰め寄った。 ネグロは不気味な笑みで自分に振りかかる剣をじっと見つめていた。

しかしネグロに当たったのは剣ではなく重い拳だった。

「くっ！！・・・！」 ネグロは驚いたような表情を見せ、口から垂れる血を手で拭いた。

「油断してただろ。 剣を持つてるからといって剣で攻撃するとは限らない！ 俺はお前を殺さない！ この拳だけで倒す！」

「調子に乗るなよ。」 ネグロが初めて言葉に強弱と感情を付けて行った。 アルスはネグロのこの行動である事を確信した。

ネグロは目を見開き、怒りをあらわにしながら剣をアルスに振る。

アルスは何度か切られながらも確実にネグロに拳を食らわせていく。

ネグロは次第に弱っていくが、その代わりに感情表現が高くなっている。

そんな攻防が続いた時だったアルスの放った拳が、ネグロの顔に当たり、ネグロがひるんだ。 アルスはそのスキを付き、とどめを刺そうと拳を掲げ、ネグロに振りおろした時だった。

アルスの拳はネグロの手で受け止められた。 ネグロは下げていた顔をゆっくりと上げ、呟いた。

「もういい・・・。 もういい・・・。」 ネグロのその言葉

にアルスは力を緩めた。

「姫坂！ 気がつい・・・」 アルスはそう話しかけたが、ネグロの様子を見て、思わず声をとめた。

「せーっかく遊んであげようと思ったのに・・・。 こんなのつまらない。 もうやめ。 殺す」 ネグロは鋭い目つきになり、手を離した。 アルスが避けようとした時にはもう遅かった。

短刀がアルスの両手両足に突き刺さった。 よろめくアルスの腹をネグロが突いた剣がつらぬいた。

「ぐっ・・・！！」 アルスは口から多量の血を吐き、その場に倒れた。 ネグロが何も言わずに剣を振りかざす。

アルスは素早く床を蹴って転がり、振りおろされた剣をかわした。

ネグロは転がるアルスに銃を発砲する。

アルスは転がりながら床に落ちている剣を拾い、銃弾をはじきながら立ち上がった。 立ち上がったアルスを見て、ネグロがあることに気がついた。

「あれえ？ お仲間はある？」 その言葉に、アルスは少し笑った。

「あーどこいっちゃったんだろおー」 アルスが棒読みで答えたかと思うと、ネグロに何かがのしかかった。

ネグロが振り替えると、そこにいたのは傷だらけのノア。 ノアがかすれた声で呟いた。

「雪音さん。 起きてください・・・」

ネグロが「罨か！？」と叫んだ。

アルスのほうに振り返った時だった。

床を強く蹴り、飛び上がったアルスが空中で拳を構えていた。

「モーニングコールでございますぞ主人様！ 起きろコノヤローー！！」 アルスがそう大声で言い、振りおろした拳は唸りながらネグロの頬に当たった。

ネグロは3mほど飛び、倒れた。 そして目を閉じた。

アルスは倒れるノアを受け止め、横たわらせた。 そして胸に手を置いた。

「アルスさん・・・何を・・・」　ノアは今にも死にそうな声で言った。、　アルスは笑顔で言う。

「俺の体力分けてやったんだ」　アルスがそう言うのと、ノアは目を大きく開き、驚いた。　そして立ち上がった。

「にい：アルスさん：」　ノアは震える声で言った。

「悪いが説明はあとだ。　ノア、お前は姫坂連れてここから逃げろ。俺はアクラハイル追う。」　アルスは雪音を指差した。

「そんな・・・僕も一緒に戦います！」

「お前が俺と一緒に来ちまったら雪音はどうするんだ？　悪いがさっきのおまえを背負っていた時、戦いで邪魔になった。　姫坂を背負って戦うことは出来ん。　頼む。　姫坂と一緒に逃げてくれ。」

アルスが苦笑いしながら言うのと、ノアは考えるように黙った。そしてアルスをまっすぐな眼で見つめた。

「・・・・・・分かりました。　死なないでください！」

ノアがそう言うのと、アルスは「ありがとな」と、礼を言って、「姫坂に言っといてくれ、絶対帰るからって。　また旅しようって。　話そうって。」　アルスがそう言うのとノアは力強くなびいた。

そして部屋から出ていった。

「よし、行くか！」　アルスはノア達が見えなくなると、剣をかまえ、揺れる基地を床で転ばないように部屋の奥に走って行った。

最終録 Last power (前書き)

最終話です。

最終録 Last power

(しまったなあ……。さっきの台詞：死亡フラグだったなあ……。)

アルスはそんなことを考えながら、時折腹部に走る激痛を堪えながら、金属製の通路を走っていた。床にはアキラハイルの物と思われる血が点々とまるで道標の様に垂れていた。

そして、血の道標が途絶えたのは大きな扉の前だった。

「ここか……」アルスは深く深呼吸をし、扉に手をかけた。

扉の向こうに広がっていたのは壁と床がガラスの様な透明の板で出来た部屋だった。

「なんだここ……」アルスは下を向いて仰天した。

「こいつ、動いてる……ゆっくりだけど海を渡ってる……」

「その通りだ。この巨大兵器ラウンド零は海を渡っている。どこに向かっているかわかるかね？」 部屋の奥から若い男の声が聞こえた。

「誰だあんた……」アルスは警戒しながら突然現れた謎の男に質問をぶつけた。

「おやおやもう忘れてしまったのか」男はふう、とため息をついて言った。

「まさか……お前アキラハイルか!？」

「魔力は素晴らしい。若返りの能力も秘めているとは。」アキラハイルは自分のポケットから小さな石を取り出した。

「なんだ随分と小さいじゃないか。」アルスは苦笑を浮かべて言った。

「半分に割ったからな。半分はこの兵器のエネルギー原になっている。」

「この建物がラウンド零なのか!？」アルスは自分が今いる広い空間を見渡しながら言った。

「ほう。ラウンド零を知っているのか。」アキラハイルは目を見開

き、驚いた。

「ノアに教えてもらった。ラウンド零という最終兵器があること。その兵器で世界を滅ぼそうとしていることも。」

「なら話は早い。ならこの兵器が何処に向かっているかまでは知らないだろ。」アクラハイルは無表情で話す。アルスはその無表情になにか不気味なものを感じた。

「さあ？知らないな。教えてくれるのか？」アルスはダメもとで聞いた。するとアクラハイルは「うむ。秘密にすることもないからな。」といい、自分の手元にパネルをだし、手で触った。すると、現れたのは北極と南極の写真と黒がかった海の写真。

「この地球は北極と南極からの電磁波で磁界を作り、保っている。」

「このラウンド零の目的はこの北極と南極で保たれている磁界にもうひとつ、北極や南極並の磁力を持つ場所を作り上げ、その磁界を破壊すること。そうすることで全世界の電子ネットワークは混乱。

あらゆる情報伝達手段が失われる。全世界が混乱に陥っているあいだにラウンド零の発信する信号により、全世界に潜ませてある零がDEAD OR DEADモードに変わり、全世界の人間は殺される。」

「何故だ！なんでそんな馬鹿な事をするんだ！」

「人間は増えすぎた。このまま増やしておけば、地球は死ぬ。ならば、愚かな人間は殺し、すべてリセットし、零に還す。そうしてこのわたしが魔石の力を使い、新しく。美しい世界を作り上げる。そのためだ。」

「とんだ自己中野郎だ。くだらない！人間だって色々努力してんだ！環境をこれ以上悪くしないように！綺麗にするために！」

「何言ってもこの計画は止まらない。」アクラハイルはパネルを消していった。

「止める！この兵器も。^{ガラクタ}てめえの腐った計画も！」アルスはそういい、剣を構えた。アクラハイルはため息をつく。

「若くなつた上に魔力を手に入れたこの私に力を持たぬ悪魔のお前

が勝てるっても？」

「さあな。でも俺は勝たなきゃいけないんだ。約束したからな」
アルスは笑顔で言った。そしてアクラハイルに向かって走り出した。アルスがアクラハイルの腹部に剣を振るが、真っ黒な煙に止められた。

アクラハイルはその煙でアルスの首を掴み、締め上げる。

「どうした。やはりこんな程度か？」　アクラハイルは締め上げながら失望した顔でアルスを見つめた。

アルスは締め上げる煙を掴み、笑った。

「魔力いただきたい・・・」アルスの体からも黒煙が上がり、アクラハイルの顔面を殴り飛ばした。

「ちっ。ちよつとしか魔力奪えなかったせいでもう切れちゃった。」
アルスは咳き込みながら消えていく黒煙を流し目で確信し、舌打ちした。

「魔力吸収が出来るのか」　アクラハイルは殴られた場所を摩っている。

「ああ！自分も今気づいた！」アルスは苦笑いしながらもアクラハイルに向かって走りだす。

「なら直接攻撃は止めよう。」　アクラハイルがそういうと、地面に柱のような棒がアルスに伸びた。

アルスは地面から伸びてくる柱を踏み台にし、アクラハイルに近寄る。だがアクラハイルが無表情でアルスに手を翳すと、アルスは地面に叩きつけられた。

「ぐっ・・・体が地面に吸い付けられる・・・。重力変化しやがったな・・・。」

「まだ上手く扱えんな。力の加減が出来ん。うっかり殺してしまうかもしれん」アクラハイルは拳を握りしめ、手から溢れる黒い煙の様な魔力を見ている。

「うがぁ！」アルスは獣のように吠え、立ち上がった。

「ふむ。なかなかの気力だ。」　アクラハイルはアルスに手を向け

た。アルスは先程の重力改造が来ると思い、足に力を込めたが、現れたのは影の様に黒い無数の槍。アルスは予想と違った結果に焦りながらも槍を着実にかわしアクラハイルに近づいていく。しかしアクラハイルは焦りもせず、ただ笑いながらアルスが自分の近くまで来るのを見ていた。

アルスはアクラハイルの前まで行き、拳を振りおろした。拳はアクラハイルの顔面を直撃した。

しかしアクラハイルは拳を食らったまま、黒い煙に変わり、姿を消した。

「時間の無駄だ。さらばだ悪魔の少年アルスよ」　アクラハイルは手を下から上へ、あげた。

アルスの足元の床が盛り上がり、アルスの身体にまとわりついた。

アクラハイルは今度は、手を上から下におろした。アクラハイルの手が下り、1秒ほどでアクラハイルの後ろの壁から先が鋭くとがった柱が飛び出し、アルスを貫いた。

壊れゆく柱と共に鮮血が舞い、アルスが倒れた。

「悪魔とはいえども力がなくなってはただの屑だったな。最後ぐらい役に立たせてやろう。」　アクラハイルはさういうと、魔力を使い、アルスの身体を浮かせた。

アルスの身体は浮かんだまま、大きな台の上に移動した。　アクラハイルはその台にアルスを置いた。

「悪魔はその体に微弱だが魔力を蓄えている。使わせてもらうぞその魔力」　アクラハイルはそう言ってレバーを引いた。　しばらくアルスを見つめていたが、飽きたのかアルスを見ることをやめ、後ろを向いた。

その時、アクラハイルはすさまじい殺気を感じ、後ろを振り返った。

アクラハイルが見たのはそこには天使のようだが、色は真っ黒の翼を大きくはやしたアルスが拳をふるう瞬間だった。

「小僧お前なんだその・・・　アクラハイルが言いかけていたが、

アルスの拳はアクラハイルの腹をついた。アクラハイルはその強い衝撃で後方に吹き飛ばされた。

アクラハイルが立ち上がったと同時にアルスはアクラハイルに向かって銃弾のように飛び、アクラハイルを壁に叩きつけた。アクラハイルは自らに突進してきたアルスの頭を思い切り殴り、地面に押しつけた。

（このガキ……。どうやってこの力出してやがるんだ……。

やつには魔石もない。力が出せんはず……）アクラハイルは魔力で手先を鋭い刃のように変え、アルスに振り下ろした。

しかしアルスの身体に魔力で強化した手が触れた途端、手を覆っていた魔力は消え去り、手だけがむき出しになった。

「魔力が……。消……」アクラハイルが驚いている途中にアルスが素早く持ち上げた頭がアクラハイルのあごに当たった。アクラハイルは衝撃で後ろに倒れる。

「クソガキがアアアアアアアアアア！」アクラハイルがアルスに向かって膨大な魔力の塊を放射した。アルスは不気味な笑みを浮かべ、自分に飛んでくる魔力に手をかざした。

魔力は手で打ち消され、煙になった。アクラハイルは冷静さを失い、同じような魔力の塊を放つ。アルスは避けたり、手で消したりしながらじわじわアクラハイルに近づいていく。

アルスがアクラハイルの前まで歩いたときだった。アクラハイルはアルスの顔に手を当て、笑った。

「油断してたなア！こいつは防げないだろお！」アクラハイルが魔力を放とうとしたときだった。

アルスの手が、アクラハイルの手から魔石を奪い取った。
「ああ……」アクラハイルが後ろに引いた。アルスは拳を握る。拳を真っ黒な光がまとった。

「さて！もうやめろ！この作戦は終わりだ！頼む助けてくれ！」アクラハイルは手をかざしながら命をこいた。

「へえ……。本当か？」アルスが笑うように問う。

「ああ！ 本当だ！」 アクラハイルが頭を下げた時だった。

「なんてなアアアあ！」 アクラハイルはアルスの手から魔石を奪い取った。そして魔力で空を飛び、逃げる。

「こうなったら、もう場所は関係ない！」 アクラハイルはそう言
って機械のスイッチを押した。

「あと2分もすればこのラウンド零は起動し、爆発する。 そうす
れば世界の終わりだ！ それまで時間稼ぎと行こうか！」 アクラ
ハイルは魔石を飲み込んだ。

「な・・・そんなことすればお前・・・」 アルスは魔石を飲み込ん
だアクラハイルから真っ黒な煙が放出される姿を見て言った。

「うぐおああああぐああああがああ！」 アクラハイルの
身体を黒い煙が覆った。そしてアクラハイルの姿を変えていく。
完全に姿の変わったアクラハイルはもう人間ではなかった。

背中には悪魔の翼が1本と半分生え、尻尾は黒く、とがっており、
長かった。

「終わりにする！ この世界を すべてをゼロに戻す！」 アクラ
ハイルには自我があった。

「終わらせない。」 アルスは黒い羽根の翼で飛びあがった。 ア
ルスとアクラハイルの拳がぶつかり合う。アルスはもはや怪物とも
いえるアクラハイルの力につぶされそうになりながらも力を込めた。

「オラオラア！ このままだと時間来るぞお！ 世界終わるぞ！」

「終わらせねえって言ってるのがわからないのかあ！」 アルスは
アクラハイルの腹にけりを入れた。アクラハイルは体制を崩したが、
すぐに取り戻し、アルスに掌を向けた。

「消え去れ我が作戦の障害イ！」 アクラハイルは獣のように咆哮
し、手から魔力のレーザーを放った。 アルスも手から黒い光のレ
ーザーを放った。

2人の力はぶつかり合い、爆発した。 アルスはその煙にまぎれ、
アクラハイルを殴ろうとしたときだった。

煙からアクラハイルの拳が伸び、アルスの右ほほに当たった。 ア

ルスは地面に落ちる。

仰向けになるアルスに向かってアクラハイルが拳を刃物に変え、突進してきた。

アルスは飛び上がり、拳を振るった。

アルスの拳はアクラハイルの腹の魔石を貫いた。それと同時にアクラハイルの手はアルスの腹を切った。2人は落下し、床にたたきつけられた。アクラハイルの身体は魔力を失い、ただの人間に戻った。

「勝ったぜ。雪音」 アルスは拳を掲げた。その時、ラウンド零が激しく揺れた。

「ははは・・・おわりだ・」 アクラハイルはそれだけ言うのと動かなくなった。

「最後の仕事といくか。」 アルスは血を流しながら立ち上がった。そしてラウンド零の核になっている魔石に近づいた。

アルスは魔石に触れると、アルスの指は弾かれた。特殊なバリアが張ってある

「うがああああ」 アルスは無理やり、バリアに手を突っ込んだ。ラウンド零は激しく揺れ、『まもなく起動いたします』というアナウンスが流れる。アルスはバリアにより、焼けていく手の激痛に耐えながら魔石をつかんだ。

そして握りつぶした。

するとラウンド零は次第に静かになり、真っ暗になった。そしてラウンド零は音を立て、崩れ始めた。

アルスは目を閉じ、口だけ笑っている。そのアルスにラウンド零の鉄の大きな部品が崩れた。

外では海に消えるラウンド零を気絶した姫坂を腕に抱えたノアが涙を流しながら見ていた。

「にいさああああああああああああああああん！」ノアの悲痛な叫び声は崩れるラウンド零の轟音でかき消さる。アルスではなくにいさんという叫び声が。

アルスを乗せたまま、ラウンド零は海に消えた。

＊1週間後＊

「雪音さん。 お見舞いに来ましたよ」 ノアがフルーツが入った袋を持って病室に入ってきた。 雪音は何も言わない。

「アルスさんなら大丈夫ですよ。 ほら。 なんか死なない感じですよ。 しかも約束しましたし……。 約束破るなんて男じゃないですからね」 ノアはフルーツを袋から出し「リング剥きましようか？」と問うが姫坂は無言のまま窓の外を見つめてた。

姫坂は心の底からアルスが帰ってくることを願っていた。しかしその5日後、近くの海岸に流れ着いたアルスを発見。

死亡が確認された。

＊3週間後＊

姫坂はアルスの墓の前にいた。 そこには「アルス」とカタカナで刻まれている。 周りの人間は不思議そうに見ていたが姫坂はそんなこと気にしなかった。

「アルス……。 約束破るなんてひどいよ……。 」 姫坂は目から大粒の涙を流しながら墓を見ていた。

「雪音さん……。 学校に遅れますよ。 アルスさんも雪音さんが元気に生活を送ってくれることを願ってますよ。 行きましよう。」 制服姿のノアが話しかけた。

姫坂は涙をぬぐって、ノアのもとに行った。 2人は今、姉弟という話で通っている。

2人が話しながら墓場をあとにする姿を一人の少年が見つめていた。
その3人を覆う大空は晴れていた。

綺麗なほどに。

最終録 **L a s t p o w e r** (後書き)

L o s t p o w e r sはこれにて終了です。ご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7944s/>

Lostpowers

2011年10月24日13時04分発行